
魔法少女リリカルなのは～疾走する聖遺物～

あじゅじゅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～疾走する聖遺物～

【Zコード】

Z0543S

【作者名】

あじゅじゅ

【あらすじ】

これは無印から始まり、未知を求め続ける少年のお話である。

protoype (前書き)

いつも、初めましての方もお久しぶりの方もおはこんばんわ。

今回はプロローグです。

次回から無印編が始まります。

今日はほとんどがセリフで描写はありませんが仕様ですので気に
なさらないでください

突然だが、あなたは既知感と「つむぎ」を経験したことはあるだらうか。

既視ではなく既知。

既に知っている感覚。

それは五感、六感に至るまで、ありとあらゆる感覚器官に訴えるもの

たとえばこの風景は見たことがある。

この酒は飲んだことがある。

この匂いは嗅いだことがある。

この音楽は聴いたことがある。

この女は抱いたことがある。

そして、この感情は前にも懷いたことがある。

錯覚
脳の誤認識が時に生み出す、なかなか風情ある一種の錯覚。

あなたはそれを経験したことがあるだらうか。

「たとえば俺は以前にも勝負に負けていたと？」

二人の男がどこか神殿のような場所で話し合っている。

「そこの景色はおかしく、一人の顔すらわからない。」

「さて、それはそうなってみなければ分からぬ。そうなってみて、初めてそうだったと思うが故の既知感である。」

「あなたのそれはただの予感だ。いや
と云つべきか」

敗北願望

「ああ、そうだな」

「不思議なことを思つお方だ」

「ならば問う。お前は数多の人間が夢想する、死者反転都やらの成功を信じてゐるのか？ 神々の賢者、空前にして絶後の最古にして最強の魔術師、世界の真理にもつとも近いとさえ言われる、ヘルメス・トリスマギストス お前ほどの男が、この愚かな絵図を肯定するか。私はそうは思わない」

「しかし事実として、あなたが存在する。それを手にした者は、必ず理を壊すと言われた破壊の鎌の正当後継者

断頭刃の死神。疾走の君。あなたがここにいる以上、ありえないなどありえない」

「だが世界は俺を殺した」

「ほう」

「初耳だ、などとは言えないだろう。世界にあってお前の知らぬことなどは、それこそ微塵もあり得ない。故に俺は、この勝負に敗北すると言つた」

「あなたは死なれるおつもりか？」

「事実としての生死は些事だ。世界の中で、俺と言つ存在がそのような位置付けられたことに意味がある。もはや取り返しは効かない」

「なるほど。たしかに死者を普通は生き返らせるなど不可能。私でさえできない。死者は死んだものゆえに、生者へ反転させるなど不可能である。この法則は甘くない。女子供の夢物語は、まさしく寝言と同義同列」

「ゆえに法則を曲げたければ、夢物語を排除せよ
お前の持論だったかな」

「祈れば叶う。泣けば奇跡が舞い降りる。そのようなご都合主義デウス・エクス・マキナ、私に言わせれば唾棄すべき邪悪でしかない。もし斯様な法則が成立つなら、我が祈りは宇宙開闢すら起こしただろ。」

万人に都合のいい幸せな夢などない。この世界は容赦なく、慈悲もなく、血と狂氣で出来ている。ゆえに我が意を通したければ、血と狂氣に染まるのみ。

一人の生者が欲しければ、その数千倍の死者を捧げよ。

破壊より再生の方が難しい。誰しも何かを奪い合つ世界においては、それもまた真理の一つ。しかし、いささか話が逸れたか。

あなたは自らの死を回避するつもりがないようだ。少なくとも世界にはそう思わせておきたいと見える

「死を想え《メメント・モリ》座右の銘でな。人はいつか死ぬということを忘れてはならない。死は、重い」

「だがそれゆえに、あなたは生死を超えるに相応しい」

「超越はお前の印ルーンだらう、俺が司るのは天秤のみだ」

「ゆえに物語といつ法則を破壊し超越できる……ふむ、前言を訂正しよう。破壊は再生よりも容易いが意義がある。いや元に戻す必要などそもそももない」

「どういつ意味だ？」

「繰り返すといつことは、存外に苦痛であるといつ意味だ死神殿。たとえばそう、あなたといえど幼年期はあつただらう。その時分、一日がとても長く感じられなかつたか？　一年とは、永遠と同義に値するものではなかつたか？」

「確かに、子供であつたなら世界は未知で溢れている。知らぬことが多い以上、学ぶべきことが膨大である以上、時はゆっくりと流れだらう」

「然り。まさしくその通り。すなわち人の一生とは、未知のものを学び、既知のものへと変える作業に他ならない。

それが故にこう思う、毎夜毎夜同じ説教を繰り返す父。同じ料理を与える母。同じ笑顔を浮かべる隣人。同じ声で鳴く小鳥。同じ匂い

しかしない家。

究極

同じようにしか沈まぬ太陽。

ああ、なんとつまらない。世界はこんなにも退屈だ。

これを老いと人は言つ。一歩一歩着実に死へと向かつていく強行軍。だがそれでも、年月と共に減つていいくといふはいうものの、未知を経験できるだけ幸せだ。生きているのだから、人は「

「つまりお前は、未知を経験できない者は生きていないと?」

「仮に、もし仮に、生まれた時から未知を排除された存在がいたとする。

既知感。

彼の生は、既に知っている世界で既に知っている出来事だけを、繰り返し繰り返し見せられるのみ。

なんという地獄の苦しみであることか。始まりから生きていかないのだから死ぬこともできない

否、死ねない。私はこの世界に生まれたといつ証が欲しい。

狂おしいほどに未知が欲しい。

私はあなたに、この世界の残酷なる秘密を教授しようとしている。

それを聞く勇気はお有か？ あなた以外の誰にも話そうとしなかつた、真理にもつとも近いとやらいづ、秘密を」

「答える前に一つ
なぜお前は、それを俺だけに明かそうとする」

「私が、あなたを畏敬申し上げてゐるからだ、死神殿

あなたは私と同じ苦境を何度も繰り返しておられる」

あなたを除けば、あなたは私が知り得る中で、もっとも悪魔に近い人間だ」

「陳腐だな、カール。 悪魔などといふ呼び名、珍しくもない」

「究極に近くなるほど、言葉は陳腐になるもの。

火を水のようだとは言いますまい。

火は火のように。水は水のように。そしてあなたは悪魔のようだ。

あなたは私を魔術師と言つたが、生憎この身はそのようなものではない。

単純に言い表せるのは強き者のみ、私は弱くいい加減だ。

常に本質が揺れ動き、名前だけでも幾百幾錢と持つてゐる。

弱い。

どうしようもなく。

脆い

それが私。

あなたの「こと」き絶対とは、比べるべくもなく卑小な存在。しかし、だからこそ分かることもあるのです

答えをお聞かせ願いたい」

「よからう、お前は俺を絶対と言つたが、たつた今、俺にもそう思う者ができた。カール、我が友……俺もお前を畏敬している。お前の秘密に触れたいと願う。それすらも、既知感とやらの環の内なかな?」

「残念ながら、そのようだ。そつなつてみて、初めてそつだつたと思つがゆえの既知感である。口惜しい。呪わしい。あなたと出会い、あなたほどの地獄に触れてても、まだ私は生きていない。このままで死ねない」

「なるほど、分かるぞ。その無念。お前の苦しみが手に取るよつに

「ならば」理解いただけるか。あなたが天秤を司るなら

「

「……面白い、全てを捻じ曲げるか」

「そう、この世界を、この物語を、天国も地獄も神も天使も、三千

大千世界の総ての物語に干渉しよ!」。

知らない結末を見つけるまで

この既知感^{ガット}を超越するまで

それこそが

「

「ああ、やついえば、俺とお前は前にもの話をしていたな

「然り。然り。百億回も繰り返した。我々は、未だこの牢獄に囚わ
れている」

「口惜しいな

「ええ、まったく。おや、ビツセラ時間も迫つてこるようですね

「では行つてくるか

「ええ、良き物語を

protoype (後書き)

感想とかお待ちしておつま～す。

episode ? (前書き)

もう少し、内容が深い物語を作りたいな～

その前に、ちゃんと連載させなくちゃなwww

「つまらんな」

少年は公園のベンチに座り、公園の景色を眺めながら呟いた。

その少年は腰辺りまで伸ばした黒髪に女と間違われそうな顔だった。

十人居たら十人とも振り返るだろう。

それは単に容姿のせいではない、少年の存在感とでも言つべきか。

見なくとも分かる。

人として 生物としての密度が違うのだ。

だからか、子供はあるか大人ですら近寄らない。

少年は空を見上げて首を振り返る。

生まれてから7年、あつという間だつた。

なぜなら縋りが既知だったのだから。

色々と試してみたが駄目だつた。

諦める訳ではないが、過去を振り返つてみても意味がない。

少年は顔を前に戻すと一人の少女が砂場で一人、遊んでいた。

ほんの氣まぐれ、そつ氣まぐれだがその少女の事が気になった。
氣まぐれでも起こす行動もまた一興か…そつ考えた少年は少女の下へと歩き出す。

なのは side

お父さんが大怪我しちゃって家族が一変したの

お母さんは忙しそうに元気もしてゐる

お兄ちゃんとお姉ちゃんはなんだか怖くなっちゃった。

私はみんなに元に戻つてほしいの

だから迷惑になる」とはしないし我儘も言わなによつてやるの。

家にいると「氣まぐれ」のお外に出る。

この時間帯なら公園が一番良いの

公園につくと少しだが他の子どもたちが遊んでいた。

知らない子達、楽しそうなの。

一人で砂場でお城を作るの。

寂しい、でも泣くのは我慢しよう

「ほひ、一人で砂の城を作り出すとは……なかなかに大変だと
は思うのだが」

そうしてみると一人の男の子が話しかけてきたの。

「…あなたは？」

「これは失敬、自己紹介が遅れたようだ」

なんだか凄そうな人なの、なにが凄いか分からぬけどとにかく
凄そうなの。

「俺の名前は……そうだな、今は迅と名乗つてる」

「今は？」

「ああ、気にしないでくれ。何分、今までこの世界では名前などと
は必要なかつたのでね」

この世界では名前が必要なかつた？

「それよりも、君の名前は？」

「ふえ？ あ、私の名前は高町なのはつて言います

「良い名だ、よろしければ一緒に城を作つても良いかな？ 恥ずか
しながら一人なものでね」

私と一緒にだ

やつぱり一人は寂しいのかな、私はすぐに頷いて城を一緒に作り始めた。

「思っていた以上に難しいな、特にこの城の頂上の屋根は」

「ふええええ！？」なんで砂で作ってたはずなのにこんな凄いのが出来てるの！？

辺りが夕暮れになり、もつすぐ日が沈みそうな時間の頃にお城が完成した。

それも城壁が私のお膝ぐらいまであって、周りの塔とかも屋根が丸い三角形になつてたりしてるので。

「我ながらなかなかの出来だと自負している」

「こんな砂のお城、初めて見たの」

二人で汚れながらも満足感が私にはあった。

隣を見てみると、迅くんはどこか悲しげな表情をしていた。

「どうしたの？」

「む？ いや、なに……またデジャブが来てしまったようですね」

「でじゅぶ？ なんだかうつむかって。

「しかし、今日せいいまでのがだ。家に帰ったまえ、家族が心配をする」

「う、うん。わかったの……あのね」

「俺ならば明日もここにいるよ、来たければ来たまえ」

「うん。」

私は笑顔で手を振つて家へと帰る、友達が出来て嬉しいの。

それからとくとも私は公園に入り浸るよつになつた。

迅くんのこととか色々と聞いたの

既知感だけ、私も経験したことがあるの。

それが生まれてからなにをしても起きるんだって。

想像がつかないナビもちょっと辛いことなんだつて言つてたの。

辛いのは可愛しがただけも私じゃなんにもしてあげられないの。

そつだ、もうすぐお父さんが戻つてくるらしいの。

それを聞いた家族のみんなは喜んでたの、もちろん私も

そのことを迅くんに話したら

「ほひ、それは良かつた。俺なのはの相談に乗ることでしか力になれなくてすまなかつたね」

迅くんはやう言つたけど違うの。

家の事と、家での私のことを相談したら

『少しばかり我儘を言つてみると良い、話に聞く通りの家族ならばきっと何かが変わる』

つて言られて怖かつたけど言つてみたら、ちょっとだけ雰囲気が変わったの。

言葉にあるのは難しけども少し柔らかくなつたつてこののかな？

お礼を言つと迅くんは微笑んで

「なに、俺は提案をしたまでだ。その案を決定し、実行に移したのは君だ。俺はなにもしてないさ」

「それでも、迅くんが言つてくれたからできたことなのー！」

「ふむ、やじまでも言つのならありがたくお礼を受け取つておひ！」

私はちよつと乱暴にだが頭を撫でられる

ふにゃー、気持ち良こよ。

そんなこともあつたりして、お父さんが帰つてきてからじょりくが
経ち

ある日、夕食の時にお母さんが私が初めて我儘を言った時の話をした。

「やうなのよ、なのはが珍しく我儘言ってね」

「やうなんだよ、それで少しほは俺達も周りが見えるよくなつたんだよな」

「うん、なのはのおかげよ」

「よくやつたな、なのは」

みんなから褒められたの、お家の雰囲気も良くなつたし全部、迅くんのおかげなの

「やう言えば、なのは最近お外に良く遊びに行くわね」

「うそ、迅くんって子が居てね

」

私はみんなに迅くんのことを話したの

私の最初のお友達になつたこと、迅くんに相談に乗つてもらつていたこと、公園でいつも遊んだりお話を聞いたりすること。

全部話し終えるとお母さんとお姉ちゃんは嬉しそう。「なのはにも春が来たのね」とか「最近の子は進んでるわね」とか言つてゐるけどどうこうとかな?

お兄ちゃんは「認めんぞ！ 絶対に！…」って燃えてるし

お父さんはなにか考え込んでるし

ふええ、なんか私やつちやつたみたいの～！

「なのは、明日お礼に行かないか？」

唐突にお父さんがそうひと言つた

「丁度、明日は休日だし翠屋も始まる前に出かけよう

「あら、良いわね。仕込みは一人に任せましょ～うか

なんだかお父さんとお母さんは乗り気です

「といつて、夕食時だけその迅くんに連絡を取れないかな？」

連絡？ やうべば……

「私、迅くんの家とか電話番号とか知らないこの

「え？」

そつだつたの、すっかり聞くこと忘れてたの

「でも大丈夫、迅くんって毎日公園に居るからー。」

そうなの、いつも居るの

「なら、明日行きましょうか」

「ああ、少し朝早いから居るか分からぬけどね」

セツヒで今日は終わったの。

翌朝、頑張つて起きて朝早くに公園に向かったの

「おや、誰もいないな」

「残念ね」

二人は公園を見渡して誰も居ないことを確認するの。

「でもなんだらうか？ なんか前と公園の感じが違うな」

「わづね、なにも変わつてないはずなのに」

お父さんと、お母さんは初めてだから分からぬだろうけど私には分かる

「迅くん、来てるの」

違和感…違つ、存在感が一番強い場所へと私は向かう

お母さん達も私の後ろに着いてくる。

ベンチの後ろの茂み

そこに入つて行くと何十匹の犬や猫、小鳥に囲まれて寝ている迅くんが居たの。

「あはは、寝てるの」

この光景が凄く可愛らしく、頬が緩んじやつてるのがわかるの。

「う…ん、なのかか?」

「なのかじやなくてなのはだよ、おせよつ迅くん」

「やあ、おはよ!」

少し眠そうだけ起きたみたいだ。

「すまんが少し顔を洗つてくれる」

迅くんは公園の水道で顔を拭いて、頭をブンブンと振つて顔の水滴を取る

なんだか不思議な光景なの。

私は少しだけ吹き出してしまった。

side out

士郎 side

「お待たせ、朝からとほ珍しい……やがりのむ一方せ？」

「お父さんとお母さんなのー。」

なのはがボク達のことを紹介してくれる。

だがボクはこの子から皿を離せなかつた。

なんだこの圧倒的な存在感、単純に人としての密度が違う
なのはがボク達のことを紹介してくれる。

そつまつさつとわかる。

桃子もなにかを感じてこのか一瞬足つともこの子から皿を離せないでいる。

でもその眼は優しげだ。

「じゃあ、私は高町桃子って言います」

「これま」「一寧に、俺は迅と言います。以後よろしく

礼儀はちゃんととしてるよつだ、悪意も感じられはしない。

「ボクの名前は高町士郎、なのはがお世話になつたね

「こえ、じりじり世話をになつましたよ。どうやらお宿は治つた
よつですね」

「うん、ばつちつ治つたよ」

不意に、田が合つてしまつた。

瞬間、ゾクリと背筋に寒気が走つた。

だがそれは恐怖からではなく、この子の深さにだ。

分かつてしまつた、このカリスマ性を

見る限りまだなのはとあまり変わらなさそうなのに……未恐ろしいな

「ねえねえ、なんで迅くんはあそこで寝てたの？」

なのはが気軽に話しかけていた。

この圧倒的な威圧ともれる存在感の中でそんなリラックスできるなんて、家の娘もある意味で凄いんじゃないのか？

「なに簡単な」とさ、あそこが俺の家だからだ

なんだつて、じつにいつことだ？

「お家なの？」

「ああ、五年はそこで暮らしていしたな」

五年…？

まだ7、8歳ぐらいだらう

「なあ、迅くん

「なんでしょうか?」

「君、家に来ないかい?」

「ははは、またまた御[冗談を

「[冗談なんかじやないさ」

「ええ、貴方さえよければだけどね」

「…………ふむ」

顎に手を当てて考える迅くん

ちらりと、なのはを見てから

「御迷惑でなければ」

「そう言ったのだった。」

この日、我が家に新たな家族が出来たのだった。

side out

episode ? (後書き)

ストックの消費は、「計画的に」

episode ? (前書き)

この作品は基本的にはリリカルなのはの原作に沿つて話を進めますが聖遺物を所持している相手とも多数戦います。

黒円卓を出すかは凄い悩んであります。が今のところ出さずに行きました。

主人公については未知を求めながらも今の現状を気に入っていると
いう状態です。

また話し方も本人が割と必死に碎けた感じにしようとしているので
ちょっとおかしな感じがするかもしれません。が仕様です。

とにかく「鑑賞くださいませませ！」

episode ?

俺が高町迅となつてしまひくが経ち、なのはは小学二年生になつた。

俺も父さんと母さんから小学校への入学を薦められたがいかんせん…戸籍が存在しなかつた為に入学などは出来ないかつた。

もううん今はちゃんと存在するためにやれるのだが小学レベルなど容易すぎるるので入る必要がない。

とにかくにもしないよりはマシなので翠屋で手伝いをしている。

年齢は小五なので身体も出来上がり始めている。

「ただいまー」

「ああ、お帰り」

俺が丁度、仕事が終わつたころにはが帰つて來た。

「迅お兄ちゃん、今日ねアリサちゃん達と一緒にフレーレットを拾つたの」

「ほひ、それで」

「でも怪我しちやつてたから動物病院に連れて行ってあげたの

「生物を慈しむことは大事なことだ、よくやつた」

頭を撫でてやるとなのはは顔を赤くして照れる。

初々しいな。

だがこれも『テジヤブ』。

忌々しい、まだ既知感^{ゲッター}の呪縛を超える」とは出来んのか

「それでね、アリサちゃんとすすかちゃんがまた迅お兄ちゃんと会いたいだつてや」

「ふむ……では近いしつに会ってでも行くとしよう」

関係ない話だがこの数年で俺の口調もこくらか柔らかくなつたような気がする。

努力していた甲斐があつたな。

まだ不慣れとはいえ少々大人びた話し方程度までは抑えられただる。

「これも、なのはのおかげか」

カールには前の口調の方が似合つていると言われたんだが、まあ今回は「ううう物語なのだろう。

「なにが私のおかげなの?」

「いや、なんでもない」

口に出してしまっていたか

とつあえずもう一度頭を撫でおぐ。

「えへへ、迅お兄ちやーん

背中に抱きつくなとこぶら下がるなのは。

思つたより軽いな。

首が閉まっているが特には気にならない。

一応、これでも俺は
なのだからな。

その夜、俺は街に出ていた。

何か嫌な予感がしたのだ。

もちろん家族には黙つて出てきている。

着いた先は公園、俺が住んでいた場所ではないが街外れにある少し
大きな公園だ。

そこでは肌の白いヒョロヒョロの男が公園でクモのよつて糸に張り
付き何人の女性の体を切り刻んでいた。

ほとんどの者が隠しをされ、両腕両足を斬られ、涙を流しながら
死んでいた。

「…………なものだ？」

やはり俺はおかしい、死体やなんでこいつなつているのかよりもまず最初にこの男のことが気になつたのだから。

「おや～？ おかしいですね、こんなところ子供が……まあ良いでしょ！」

男は空中に張つたクモの巣のような場所から飛び降りて俺に向かつて名乗りを上げる。

「私の名はサルバ、あなたは？」

「俺の名は迅、といひで聞くが……このやつらはお前が？」

顎で呪るそれでいる女性たちを指すとサルバは何がおかしいのか笑い出した。

「ほほほほほ！ ええ、そうですよ。私の趣味とでも言いますかね」

「下種な趣味だな」

吐き捨てるよつて言つてしまふ

「よく言われますよ、まあ言われたら

サルバの目が冷え切つたと思つたら

「殺してしまうんですけどね」

一気に俺を殺せんと迫つてくる無数の糸、なるほどな。

「あまり舐めないでいただきたいのだがね」

瞬間、全方位から襲つてきていた糸が切り刻まれた。

「……は？」

「なにを驚いてるんだ？ 君もその気になれば似たような……ああ、済まない。君の聖遺物は糸だつたか」

「な、なにを？」

「なに、“活動”を発動したのさ。もしかして知らないのかね？ 見たところ“形成”は出来ているみたいだが」

「なんのことだ！！ 活動？ 形成？ 一体、一体それはなんのことなんだ！！」

「知らないのならばそれで構わんよ、さて君が喰らつた魂も俺の物とじょうつか」

魂を回収するつもりも今までなかつたがこの下種からなら別に構わん。

「安心したまえ、別に殺すわけではない。俺の中で永遠に生きる」

「ふざけんなじや BSNVCIKANSck1snvcs・あんvs・¥」

サルバが何かを言い終わる前に俺は“活動”で切り刻んでやつた。

「ほう、戦場でかなり稼いだよつだな……せつと一万近くは吸収している」

それでも少ない方だがね。

俺は辺りを確認し、死体の処理をして、もうなにもないと確認すると家に帰つた。

すると玄関から外に走り出ていくなのが見えた。

「あの慌てよう、ただ事ではなさそうだが…」

玄関の前で俺はなのはの背を見送つていると中から兄さんが出てきた。

「迅ー、今、なのはがー！」

「ああ、なにやら凄い慌てていたな」

「どっちに行つた！」

顔が近い、俺にそういう趣味は無い。

「兄さん、ここは任せてもらいたい。俺が連れ戻すから兄さんはなのはが帰つて来た時のお説教役にでもなつてくれ」

「あ、ああわかつた。すまないこぢらも冷静さを失つていたようだ

システムだからな

「では行ってくる」

その気になれば一瞬で追いつけないこともないのだが俺は兄さんの前だし普通の人間よりも少し早いぐらいの速さで走る。

さて、なにが起じるやう。

未知のことが起きてほしいと切に願いながら俺は走った。

episode ? (後書き)

聖遺物でなにか良いアイディアがあつたら教えてください。

さて、今回はやられ役のサルバ君でしたね。

自分の意図としてはこいつはすぐにやられたけども今後、どうこう風にも扱える存在だと自分は思っています。

ある意味、伏線とでも言いますかね？

とにかく今回までは一直到りまで！

感想お待ちしております。

episode ? (前書き)

どうも皆様、こんばんわ

さて、今回はあまり話が進みません。

Diesの原作を知っている方は分かりますが獸殿

この人の話かたって案外難しい。

しかも実は設定とかあんまり決めてないし

こりゃあ、やべえな

episode ?

俺が着くとなのはがなにやら変身をして思念体と呼ばれている存在を拘束していた。

「（ふむ、これはカールが言つてゐる魔力といつやつかな？）」

なのはから約百メートルは離れた地点から俺は見ている。

周りの人間が言つには俺の存在感つて半端がないらしい。

まあ、俺の中にはさつきの一万も含めて

は居るからな。

魂だけの多さで言えばカールと並べる。

なので氣づかれないとは思つてゐるが念のために距離を開けているのだ。

既に人を辞めてしまつてゐるこの身、百メートル先に居るのはが鮮明に映るし声もはつきりと聞こえる。

「ジユエルシード？？？封印！」

そなのはが叫ぶと思念体であつた異形の物が宝石となつて杖の中に吸収される。

あの杖は聖遺物か？　いや、それとはまた違つただ。

しかし、これほどの事じとも既知とは……

いいや、気にするのもあまり良くない。

俺は曲がり角に隠れ、タイミングを見計り出してこくとじよつ。

はあ、兄としての人生も存外に疲れるな。

なのは side

「ふええええ、『ごめんなさい…』」

パトカーの音がして私は走り逃げる。

少し、ほんの一分ぐらい走つて家の近くの公園に着いたら、あの感覚が私を襲つてきた。

「なのは… 気を付けてなんかいる…」

ユーノ君が声を上げて警戒しているけども安心してほしいの。

「大丈夫だよユーノ君」

これは危険なものじゃないの。

振り返るとゆっくりと歩き寄つてくる迅お兄ちゃんが居たの。

「夜のお散歩か？ にしては疲れているようだな

言葉一つ一つが重みつて言つか威圧感がある。

「ねえ、迅お兄ちゃん。なんか夕方よりも存在感が増してない？」

「やうだうか、自分としてはあまり直覚はないのだがな」

絶対そうだよ、だって私だって一瞬ビックリしたりやつたんだもの。

でも、これでも抑えてるんだよね。

気配を常に隠すひとつひとつの存在感

やつぱつ迅お兄ちゃんは凄いよ。

「それよりもだ、はやく帰らうか」

「うんー」

「アレのフーレットもかな？ ビツヤーのがお皿ついだつたら
しごしな、具合が悪そうだが大丈夫か？」

「ふええー？」

ユーノ君が凄い汗を掻いてるのー。

「少し遅すぎるかな？」

ああ、なるほど納得したの。

初対面で迅お兄ちゃんの顔を真正面から見ちやつたからか。

今思えば、最初会ったあの頃より遙かに兄ちゃんが色々と増してゐるの。

私は遙お兄ちゃんと一緒に帰った、帰ったら私はお兄ちゃんに、遙お兄ちゃんはお父さんに怒られちゃつたけども。

side out

ユーノは家で飼うことが決定された。

なのはは喜んでしゃべっている。

見たところ、賢いようだし、食べ物に被害を及ぼさないよつなどはないだろ？

そして、なのはが学校に行っている間

ユーノの世話をしていた。

世話と書いても餌を貰ふまま部屋に野放してはいるだけだが。

椅子に座り本を読みながら俺は考えていた。

ユーノが先程から俺を凝視してきていた。

だがやはりか、俺の存在に抵抗があまりなく調子が悪そうだ。

いつも一緒にいる高町家の家族でさえ俺が気配を抑えなければ警戒態勢に入られてしまうのだ。

まあ、なのはだけはいつも通りにしてくるんだがな。

ある意味でそれが未知なのだがやはり既知であつた。

他に俺を恐れない存在など…ああ、カールが居たな。

確かに前例が居たのならそれは既知だ。

ともかくだ

「ユーノ、どうした？　俺が恐いか？」

俺が視線を向けるとユーノが硬直したかのようにビクリと震えて動かなくなる。

「別に恥じることはない、大抵の人間は俺を見て恐れたりするからな」

そう考えると翠屋に来るお客様は凄いな、俺が普通に手伝つていても平然としているんだから。

もしかして翠屋にはなにかそういう魔力があるのかもしけんな。

「ああ、それと遅れたが昨日はお疲れ様。俺も、母さんのあれは何度も体験しているから疲れるのはわかるよ」

「さやー

なんとなくだが俺とコーノの間に絆つぽいのが生まれた気がする。

「 もうだ、俺はちよつと用事があるので少々出かけるが…… コーノ
せじつかぬ。」

じぱりとコーノは考へて

「 もう 」

「 ははは、まあ俺と居ても疲れるだらうな。では留守番は任せた」

結局はいつまでもつらじしこ。

俺としても困ないほうが好都合だったのをそのままにしておく。

れて、今日は神社へと向かうか。

episode ? (後書き)

いかがでしたか？

ちなみに結構、存在感のことを言っていますがわざとです、仕様です。

しつこようでしたらすみません。

容姿とかにもあまり触れていないので近づけに設定とか書いてみよつと思つます。

ではでは、感想お待ちしておつまます！！

episode ? (前書き)

同日投稿

今日は行けるといつまで連続でやつてやるじゃない！！！

episode ?

今日は手伝いも無い日だったので俺は街を見て回ることにした。

それこそ公園暮らしの頃にも見て回っていたのだが改めて見て回る。

以前の物語では俺は傍観者だった……らしい。

大まかに、流れぐらいしかしらないが

藤井蓮が流出へと至り、ラインハルトが既知感ゲッターから抜け出して、マリイが世界を包みこんだ。

傍観者である俺はそれを大まかな知識として知らないが獣殿が羨ましく思える。

ああ、未知とはどういう気分になるのだろうな？

カールは並行世界と言つていたな、“あちら”的カールもラインハルトと同様に抜け出したらしいがこちらのカールは未だに抜け出せぬ。

かと言つて俺は獣の代わりの役でもなさそуда。

とにかく俺はこの物語がどういうものか分からんのだが、聖遺物の所持者達を考えると

「正直、この世界に聖遺物使いは少ない……それに加えて皆、なにも

知識がない」

今まで戦ってきた聖遺物使いは数人居たが誰もが“形成”あるいは“活動”までしか使えなかつた。

おまけに“聖遺物”的何たるかまで知らない始末。

魂の吸收だけは聖遺物が勝手にやつてくれるの出来ていたみたいだがどうにも使い手の渴望が足りんな。

聖遺物と使い手が進化する条件は一つ

“魂”と“渴望”

この一つがなければいつまでたつても“創造”までは辿り着けん。

良質の魂を数万、または悪質でも最低でも数十万吸わねばならん。

同時に自分の一番の渴望を狂うほどに願わねばならない。

話が逸れてしまっていたな。

とにかく今日は靈地を探索しに来ていた。

獸殿も黒円卓もスワースチカもないのだが靈地の存在は無視できぬ。

仮に、そこで聖遺物の所持者が暴れ大量虐殺したり、戦闘を行つてしまつたら些か面倒くさいことになつてしまつ。

だが、カールがそれを良しとしないだろうがね。

その靈地の一つが神社

「ここは一番この街で靈格が強い場所だ。

「む、なるほどな。ここは昔はそうだったのか」

神社の鳥居を潜った瞬間、俺は何かを取り込む感じがした。

ここは戦国時代あたりから激しい戦地だったようだ。

怨念たちが沢山いる。

それを俺の聖遺物が勝手に吸い上げてしまうのだ。

ここに神社が出来た理由としてはここにいる怨霊達が外に逃げず、中でも暴走しないように抑えるために作られたのだろう。

だが今日で俺がその魂を全て喰らつてやる。

なにも本人はしていないのに強くなつていく、それは一向に構わないのだがこれはまたなのは達になにか言われるな。

魂を吸うことはそれだけ俺の魂を強化：この場合は存在感とでも言つたほうが解りやすいか。

とにかく俺はまた威圧感が凄くなつたというわけ。

「…………帰るか」

そう思つた矢先、神社が青い光で包まれた。

この感じ、昨日も

鳥居の近くで一人の女性が倒れ、大きな獣が吠えていた。

いま、探索をかけてみたが、なのはが来るまで五分少々

丁度良い、準備運動ついでに時間を稼いでやろう。

なのは side

「なのは、レイジングハートを…」

「うん！」

私は階段を駆け上がりながらユーノ君に言われた通り、ネックレスのようにしている紅い宝石 レイジングハートを手に持つ。

そのまま階段を上り切つて神社に着くと血を流している大きな黒い
ななにかが居たの。

「幻獣生物を取り込んでる」

「どうなるの？」

ユーノ君が不安そうに咳いてる。

なにか大変なことがあったのかな?

「実体がある分、手強くなつてる」

「大丈夫…多分」

私は目の前で吠えている怪物にも怖氣ずに自信満々に答える。

「なのは、レイジングハートの起動を…」

「ふえ、起動つてなんだっけ?」

あれ?

なんだっけ、確かに昨日なにか言つたような気がするの。

そういうじている間に怪物は走ってきてくる。

「『『我は使命を』から始まる起動パスワードを…』

「ふええええ！ あんな長いの覚えてないよーー！」

着実に迫つてくる怪物、でも怪我をしていたせいか少しだけ挫けた。

「もう一回言ひから繰り返して…」

それを見逃さなかつたユーノ君が私の耳元で言つてくれる。

「わ、わかった！」

でもやつぱり間に合わず、怪物は私に飛びかかってきた。

目を瞑ると、大好きな迅お兄ちゃんが出てきてしまい私は目を開けた。

「レイジングハート！…！」

そう叫ぶと手に握っていたレイジングハートが桜色の光を出し始めた。

「Stand by . Ready」

次に私の体が光に包まれ

「set up」

そうレイジングハートが言った瞬間、レイジングハートは宝石ではなく杖となっていた。

「パスワードなしでレイジングハートを起動させたー！？」

怪物はそんな私を警戒したのか様子見をして、いきなり私に飛びかかるてきた。

「なのは、防護服を！」

「え、あ、はい！」

「Barrier Jacket」

バリアジャケットに包まれたと同時に私と怪物は衝突したのであった。

side out

ゴーノ side

「疲れた」

そう言つてなのはベットにダイブする。

「今日はすじかつたよ」

まさかあんなに手際よくできるなんて思わなかつたし、やっぱり素質があるんだな。

「ねえ、なのは聞いて良いかい?」

「な~」「、ゴーノ君?」

「なんで今日、あの時田を瞑つたと聞いたり急に田を開いてレイジングハートの名を呼んだの?」

それが今日の疑問の一つ

もう一つはなんあのジュエルシードを取り込んだ怪物が怪我を負つていたかだけど

「田を開つたらね、迅お兄ちやんのことを聞いて出したの

「迅… あの人のことか」

一目でわかる、普通の人間とは圧倒的に、何もかもが違うと初対面の時、あの人の目を見てしまったなら不甲斐無いけど息すらもできなかつた。

いいや、今でもやうだ。

お昼時に『ゴーノ、ビーヴした？ 僕が恐いか？』

と言われて僕は硬直してしまつた。

言葉にではない、意識して見られただけで硬直してしまつたのだ。

『別に恥じる』ことはない、大抵の人間は俺を見て恐れたりするからな

そう言つた迅さんは悲しむでもなくへんへん普通に答えた。

それからすぐに出かけてしまつたけどもしばらく動けなかつた。

「うそ、迅お兄ちゃんって威圧つて言つのかな。とにかく凄いよね

それは同感だ、あれほどの威圧なんて他に知らない。

「お兄ちゃんに比べたら、あれぐらいならなんとも思えなかつたの」

「まあ………… そうだね」

なるほどね、納得だ。

「怖くなくなつたら今度は逆に迅お兄ちゃんが背中を押してくれてるみたいな感じになつてえ」

そこでなのはは寝てしまつた。

今はぐつすりと寝かせてあげよつ。

side out

episode ? (後書き)

ただいま、ユーチューブでアニメを見ながら原作に一応はなぞりながらもじつをじつといじくつしていくか考えております。

episode ? (前書き)

司口三川…俺はまださへひざへんがー。

episode ?

平凡な小学三年生だったはずの私、高町なのはに訪れた突然の事態

渡されたのは紅い宝石、手にしたのは魔法の力

出会いが導く偶然が今、静かに動き始めて

立ち向かっていく日々に俯かないように

魔法少女リリカルなのは、始まります！

さて、突然だがここで説明をしておこう。

聖遺物を操り魂を喰らうものをエイヴィヒカイトと言つ。

聖遺物を操るエイヴィヒカイトには、熟練度に応じた“活動”“形成”“創造”“流出”の四つの位階がある

ここでは活動位階について説明しようか

“活動”とは聖遺物の特性を自身に乗せる基本中の基本

俺の聖遺物は…今後お見せするとして、以前にあの三流の糸を切ったのはこれのおかげ。

俺のは結構便利で全方位に向く。

“形成”より先は後々に話していくたいと思つ。

「どうやら、終わったようだな」

学校の屋上にいた俺はなのはが戦い終わり、青い宝石を封印したのを確かめてかなりの距離を取りながら尾行する。

悪いがこれも父さんからの命令でね。

だがなのは、安心すると良い。

魔法とやらについては誤魔化しておいているから。

今日は父さんがコーチ兼監督をしているサッカーチームの試合で居ないので翠屋は母さんと姉さん、バイトの若い人が何人かで切り盛りしている。

俺も手伝いで昼頃まで手伝い、今は暇をしていたので図書館まで来ていた。

神話の本を探す為に俺はその類の本が置いてあるコーナーに向かう

と車椅子の少女が居た。

頑張つて手を伸ばしているが届かずにしてる。

仕方がない、手伝つとしよう。

「これか、君が取らうとしていた本は？」

「えー？」

「北欧の神話か、なかなかに興味深いな

それ以上に初対面で俺の目を真正面から見て驚きぐらいしかしない
この少女の方が興味深いが

「あ、ありがとうございます」

「いやなに、困っていたようなのでついね。それとそんな異常ならぬ
くても良い、もつと碎けた感じで話しててくれて結構

「お、お兄さんだって碎けた感じで良いですよ？」

前言撤回、驚いているだけではなく恐怖もしてくるようだ。

良く見れば手が小刻みに震えている。

「これは済まない。もともとこれが素の喋り方でね。直そうとは思
つてゐるのだが案外口調を変えるといつのは難しいのだよ」

「そ、そうですか」

だがしかし、声や体は震えているもののよく顔に恐怖を出さないものだ。

「ふむ、気に入つた」

「え？」

俺の言葉が理解できていないのか、再度言つ。

「君のことが気に入つたのによ、名前は？」

力を抑えるのをやめて、顔を覗き込むように近づけたら涙田になり、表情も泣きそうな顔になってしまった。

「ひ、人に、名前を、き、聞く、聞くときま、自分から召乗るもんじやないんかな？」

しかし、口から出てきた言葉は俺に対する反論

「ぐ、ははは」

思わず、口から声が漏れる。

「ははは、はははは、はははははははははははははははは

「一。」

「こじが図書館だといつとも忘れて俺は声を上げて笑い出す。

幸い、こじは図書館の方だし、お昼時といつともあって人は

居ない。

「いや失敬、しかし、本当に恥々しい！ 私が知る限り、ここまで威圧を掛けて反論してきたのは君が最初だというのにこれも既知だつた！ いや、これは新たな出会いの為と甘受するとしてよい。」

既知が口惜しい、恥々しい、だがこの少女は面白い。

「俺の名は高町迅、君は？」

「えっと、八神はやてです」

「八神はやて…良い名だ」

その名前を噛みしめるように何度も口の中で復唱する。

「よろしければ、友になってくれないか？」

心からそう願つた。

カール、どうやらこの物語には俺を楽しませられるような存在がいるようだぞ。

「 私なんかで良いん？」

「俺が友にならうと言つた人物が“なんか”とは言つてほしくないな」

俺がそう言つたら、なぜかはやは泣き始めてしまつた。

「うひ、嬉しいねん。今まで友達が居らんかったから

「では俺と友になってくれると?..」

「……うん」

迅はまだ知らない、後にこの少女が闇の書の主になるところを。

「いやー、なにからなこまですまんな

「なに、友が困つてこゐるのだ。これぐらこのことじつて当然

俺は車椅子を押しながらはやてのことを見る。

友になつてくれと言つた後、俺の田を見てもつ一度威圧を掛けてみたが恐怖の欠片も田に映らなかつた。

こんなことカール以来だ。

やはり、俺の友になるのなひばいれぐらいでなければな。

「家まで送り届ければいいのだな?..」

「うん、それでけつ」いや

では、我が友を丁重に送り届けるか。

episode ? (後書き)

書いてて気が付いた

主人公がなのはの家族と全然絡んでない

でも良いかなっていう自分が居る。

episode ? (前書き)

はつはあ～！

やべえっすよ、もひこれで何回目の更新だ？

このまま無尽縦を続ければいつまでも悪くはねえかもよー。?

episode ?

はやてを家に送り、日が暮れるまで世間話をした。

それなりに有意義な時間だった。

帰り道、コンクリートでできた道や壁がめちゃくちゃになっていた。

これはジュエルシードとやらの影響か？

この規模になると俺の聖遺物でも確かに可能なのが一つあるが誰か他人が聖遺物を使った気配はなかつた。

となればジュエルシードしか現状としての可能性はあるまい。

街がこのようになつても驚きはしない。

悠々と俺は街を歩き、田の前のビルの上に向かつ。

ここから六百メートル先の海上に危険分子らしき気配を感じた。

いつもなら放つておくが友と家族がいる街に被害を出そうとする者がやってきたのだ。

加えて今日は機嫌が良い。

「おや、先客がいたか」

「「つー?」

ビルの上に着くと黒い服を着た少女と赤い毛並みの犬が居た。

「そう身構える必要はない、俺はこの街に被害を出そうとしている危険分子を排除しに来ただけだ」「

警戒を解かずに戦闘態勢で杖の先を俺に向けてきている少女達に一瞥くれ俺はここから狙いを定める。

先程も少し話に出てきた都市規模の攻撃が出来る聖遺物、その一つをお見せしよう。

「少し離れていたまえ、火傷をしても知らんぞ」

俺の背後に紅蓮の魔方陣が浮かび上がる

そしてこの魔法陣は魔砲の砲口、両者の距離はざっと六百メートル以上

問題ない、射程圏内だ。

「Y e t z i r a h (形成)

イエツツラー、それは形成位階の聖遺物を呼び出すための呪文

弾ける魔性の大放火、海へと着弾と同時に半径百メートルが紅蓮で燃えた。

「Der Freischutz Samiel (極大火砲・狩獵

の魔王)

「

デア・フライシエス・ザミエル

それが紅蓮の赤騎士の形成の名だった。

しかし、それがどういった形の聖遺物なのかの全貌はまだ見えていない。

「す、す」「

「なんだい、この魔法。めぢやくぢやじやないか

それはそうだろ？、俺でさえ広範囲大火力で言えば堂々の一位に君臨する代物だ。

焼き払つた相手が喰らつた魂は聖遺物へと流れ込んでくる。

ふむ、こいつも一万弱か

「害虫は焼き払つた、そこの二人」

ビクリと体を跳ねさす二人

「恐がらなくとも良い、君たちは俺が思つてゐる害虫とは違うようだし襲わんよ。ようこそ小さな魔法使いとその使い魔殿、海鳴は君達を歓迎しよう。この街で何を成すかは君達次第、是非にも頑張つてくれたまえ」

そのまま白騎士の活動位階である“神速”で去りうとした時

「ま、待つてー。」

不意に金髪の少女に呼び止められた。

「なにかなお嬢さん?」

「私の名前はフェイド・テスタークッサ、こつちは使い魔のアルフ、あなたの名前は?」

これはこれは、気配を最大限に抑えているからまだここまで滑舌が回るのか。

では一つ、抑えを無くしてみますか。

「

あつ

「

あああ

尻餅をついて俺を見上げる一人と一匹

俺ってそこまで凄いのだろうか?

「俺の名は迅、高町迅と言つ。では今度こそ、頑張ってくれたまえ」

今度こそ“神速”で一気に闇夜に飛び込む。

空は飛べねど、駆け抜けよつ。

新たな来訪者への福音とともに。

フェイト side

「う、

はあ、はあ」

なんて人だったの

「だ、大丈夫かい、フェイト」

「ア、アルフ、こそ、大丈夫？」

なんだつたんだろう、あれは？

大火力の魔砲もそつたけど、その人自身が人間としての規模が違うように感じた。

あの人のことを探りたい。

side out

episode ? (後書き)

バイト終わって、帰宅してから寝てない。

否、なぜか眠れない。

ゆえに、今の俺は最高にハイってやつだ

episode? (前書き)

結局、次の日に登校しちまった。

俺は無力だ！

そんな話はさておきながら、大変なことに気が付いた。

俺の携帯とPCで『魔法少女リリカルなのは』ってタグから検索してもこの作品が出ないぞ！？

いつたいどうしちちまつたんだ！！

episode?

なのは side

きっかけは、きっかけと偶然でした。

だけど、いろんな偶然をいくつも重ねて、その中から自分の道を間違わないよう選んでいく

みんな、そやつて過ごしていぐものだと想つから

偶然で始まつたこの日々も……だから私も、間違えずに進んで行きたいと思つ。

自分の意志で、自分の想いで

さて、日本国内は全国的に連休です。

喫茶『翠屋』は年中無休ですが連休の時などはお店を店員さんたちにお任せして、ちょっとした家族旅行に出かけたりもします。

今回は、なのはのお友達一同と、お兄ちゃんとその彼女さんの月村しのぶさん、そして月村さん家のメイドさん達も一緒です。

近場で一泊、のんびり温泉に浸かって日頃の疲れを癒そつとこの高
町家の家族旅行としてはいつものプランです。

『なのは、なのはー。』

前の席でお姉ちゃんの肩に乗つてこるコーノ君から念話が届いた。

『なのは、旅行中ぐらにはむくじしなきや駄目なんだからね』

『わかつてるよ、大丈夫』

先週であった、真っ黒の魔法使いの子と、あれから一つも見つけられていなしジュエルシードのこと

色々考えすぎちゃってるから、少しゆくつお休みするよ!といつ
コーノ君のお勧めもあって……

とりあえず、この一日間はなのはも年相応にお子様らしく

「どうしたのだ一人で、みんな中に入つて行つてしまつたが?」

「ふええー!」

慌てて振り返ると五メートル先ぐらに立つお兄ちゃんが立つて居た。

あれ? 今、耳元で話しかけられたぐらいに感じたんだけど

「はやくこべぞ」

「あ、待つでよ~」

相変わらず、迅お兄ちゃんの背中って大きく見えるな~

あの雰囲気も怖がる人が多いから頑張って抑えてみてるみたいだけ
どやつぱり立ってるよ。

だつて迅お兄ちゃんがあるくと自然と前の人気が退いてくれてるし、
やつぱり凄いの。

迅お兄ちゃんの近くにいると安心するし、結構優しいし、私はお兄
ちゃんが大好き。

でもお兄ちゃんは呪いみたいなのにかかっているの。

既知感、生まれてからそれが何やっていても起きちゃう感じの。

魔法を見せてみれば解かれるかもしれないけど、下手したら巻き込
んじやうし

迅お兄ちゃんにはいつも助けてもらっているんだからこれ以上は迷
惑を掛けられない。

とまあ、迅お兄ちゃんの膝の上で考へてる自分にそんな説得力がな
いのは自覚しているの。

でも、仕方がないことなの。

迅お兄ちゃんが胡坐搔いてたらそこに、膝の上に座れって私の頭が

やつ言つんだもん。

アリサちゃんとすずかちゃんはまだ池の鯉を見てたし、わいせつじだけ甘えられるかな。

胸に頭を擦りつけた。

迅お兄ちゃんはちょっと困ったように、でもほとゞぎ表情を変えず、優しく頭を撫でてくれた。

「や～、気持ちいいよ。

さっげなくコーナー部にもクッキー渡して、優しいね迅お兄ちゃんは。

「ああ！ なのは、居ないと想つたら迅さんと一緒に居たのね！」

むう、もひつひと甘えてたかったけど仕方がないの。

「私も、迅さんには甘えよ」「そうだ、お風呂早く行きましょうか。なのは！」「うん、アリサちゃん！」酔いよ一人とも～」

すずかちゃんがお兄ちゃんに甘えようとしてだから畳座にアリサちゃんと連携してお風呂に連れて行く。

アリサちゃんもすずかちゃんも、迅お兄ちゃんに甘えたいみたいだけどもそつは行かないの。

迅お兄ちゃんは私の物なの、私を一番愛してもいいだから誰にも渡さないの～！

知らぬ間に、迅は将来の魔王にヤンデレフラグを建てたっぽかったのであった。

side out

俺は足湯があつたのでそこで足湯に浸かり、しばらくしてから温泉に入るべく男湯へと向かつた。

すると途中、見覚えのある“魂”をした女性が居た。

「あれは、このまえの使い魔……アルフと言つたかな？」

なにやら俺の妹とその友にちよつかいを出しつづけてるので躊躇せねばな。

「あんま賢そりでも強そりでもないし、ただのガキンチョに見え

」

最後まで言い切る前に俺は一步踏み出す。

「知り合いかね、君たちは」

勢いよく振り返るアルフ、ここつゝの田には俺がどう映つているのであらうな？

「い、いいや、あはは、ちよこと世の知り合いに似ていたもんでさ

と特にだ」「そつか、知り合いは大事にせねばな。特に昔の知り合いともなる

「や、そうだね。それにしても可愛いいフーレットだね～

ぐじぐり、とコーンの頭を撫でるアルフ

「じゃあ私はもう一風呂浴びてくれるかな」

「では俺も、丁度女湯の隣だしな男湯は

そのまま一緒に俺は歩き出す。

『今のことには挨拶だけね。忠告じとくよ、子供は良い子にしてお家で遊んでなさいね。お痛が過ぎるとガブッと行くわよ』

別れ際、そう念話でなのはにアルフが伝える。

曲がり角を曲がり、なのは達から見えなくなるとアルフが壁に寄りかかって話しかけてくる。

「なんであんたがここにいるんだー？」

「なんでと言われても…旅行だな」

「旅行？」

「ああ、別に君達にワザと会つたために来たわけじゃない。それこそ偶然だ。だがしかし…君が居るということはかなり彼女も。ジューエルシードと言つたかな？ あれがここにあるのか？」

「なんであんたがそれを！」

「おや、カマをかけてみたら思いの他当たってしまったな」

今まで確証がなかつたので断言できなかつたがこれで確定だな。

「まあどうでも良いや、集めるのならば好きにすると良い。そちらから襲つてこなければこちからからも襲わない」

俺はさつと風呂へと向かひ、後ろでなにか言つてこよつだが無視をした。

フュイントルフ

『あー、もしもフュイントルフアーヴルフ』

私が木の上でジュノルシードの気配を探していくとアルフから念話を入つた。

『ちょっと見て来たよ、例の白い子』

『やつ…どうだつた?』

『ん~、まあどうしたことないね。フュイントルフの敵じゃないよ

『やつ、いつも少し进展。次のジュノルシードの位置がだいぶ特定できてきた、今夜にも捕獲できると思つよ』

『ナイスだよフュイントルフ、流石は私の『主人様』!』

『ありがとう、アルフ。夜にまた落ち合おう』

『はーい。あ、そうだフェイト』

『なに?』

心無しかアルフの声が不安そつだ。

『氣づいてると思つけど

『ああ、うん……彼が居るんでしょ?』

一瞬、一瞬だけ旅館全体の空氣が変わった。

その重圧は間違いない、あの化け物のような少年だと感じて分かつた。

『大丈夫だった? ここに居てもかなり苦しかつたけど』

『死ぬかと思ったね、一秒もあの重圧を感じてないのにあの瞬間が永遠に感じたよ』

『……あの人はなにか言つてた?』

『ここに来たのは旅行だって、こちらが攻撃とか邪魔しない限りはなにもしないから精々好きにしろだつてさ』

良かった、もしあの人人が敵になるんだったら私達が死んでたかもしない。

『じゃあ、夜に

『はーい、フロイトもあまり無理するんじゃないよ~』

そつと言つて念話を切つた。

あとであの人のところに行ひへ、話をしてみたいな。

side out

夜、なのは達が寝ていると大きな力が発動したのを感じた。

「つーー！」

なのはが起き上がり、急いで着替えて外へと出て行く。

あの黒い魔法使いとの戦いだらう、ここから傍観させてもらうといふ。

なのは side

ジユエルシードのアーマーまで走つているとお空が光つたの。

「あれは

封印したときの光…といつゝとはあの黒の子が来てるの…?

早くしないと!

池のそばにつくと一人の女人の人があいた。

「あ～らり、あらあらあら」

「あ～！」

「子供は良い子でつて言わなかつたけかい？」

さつき、旅館で私達に忠告してきた人なの。

「それを、ジュエルシードをどつする氣だ！？」

ユーノ君が叫ぶ。

「さあね、答える理由は見当たらないよ
それにさあ、私親切に言つたよね？」

犬みた的な耳をした女の人がこちらをほつきりとした敵意を含んだ
目をして睨んできたの。

「良い子で居ないとガブツと行くよつて」

女の人ガ赤い毛並みの狼に変わつたの！？

「やつぱり、あいつ、あの子の使い魔だ」

「使い魔？」

なんなのそれって

「やうやく、私はこの子に作つてもらつた魔法生命。製作者の魔力で

生きる変わり命と力の全てを掛けて守つてあげるんだ

じゃあ、あの人（？）は黒い子が作ったの？

「先に帰つてて、すぐに追いつくから」

「うん、無茶しないでね」

「のまほじや逃げられちゃうの…！」

「OKー！」

赤い狼さんが飛びかかつってきた。

ビビビ、ビッシュ！

身構えると同時にぐらりいに私の周りにバリアが張られた。

「なのは、あの子をお願い！」

ユーノ君！？

凄いの、こんなことが出来るなんて予想外なの！

「わかるとでも思つてんの！」

「させてみせるわー！」

バリアの上に魔方陣が現れて、次の瞬間にユーノ君と狼さんは消えちやつた。

辺りを見回しても居ないし……

ふええ！ ドリ行つちゃたのー？

「結界に強制転移魔法、良い使い魔ね」

「ユーノ君は使い魔つてやつじやないよ、私の大切な友達」

私がそう言つと、一瞬、一瞬だけど黒い子の皿が揺らつた。

私と黒い子は向かいあつてお互に動かない

なんで、なんでもんな悲しい皿をしていろの？

私は「この子のこと」を知りたいくと思つた。

side out

ユーノが予想以上に頑張つていだがどうやら無駄そうだな。

俺は観戦をやめて浴衣のまま外に出て行く。

予想ではこのままゆづくつと歩こていけば一度良いくらいに着ける
と思つてゐる。

結果はなのはの負けだつた。フロイトは見る限り、結構な戦闘経験
を積んでいるに違ひない。

それを魔法使いになつて一ヶ月もしていないなのはが追い越せるまで、数も密度の濃さも経験してはいない。

俺が向かっている途中、激しい閃光がした。

やはりこことか、なんというか。

到着してみると、夜空を見上げてなにかを考えているなのはが居た。

今回の戦いで、なのはは向を誤ったのだろうな。

episode?（後書き）

誰か俺の謎に答えてくれ！！

episode? (前書き)

いかん、完全にスランプだ

episode?

なのはside

はあ、最近迅お兄ちゃんとあまり会話できていない気がするの。

フロイドちゃんに旅館で負けた、偶然やつていた迅お兄ちゃん

思えばあの時に少し会話したぐらいじゃないのかな？

フロイドちゃんのことが羨えてみんなとも碌に話せなかつたし

フロイドちゃんには負けたるけど今度は負けないために迅お兄ちゃん成分を摂取しなきや。

よし、決めた！

旅館から帰つて、みんなが寝ちゃつた頃

私はベットから起きて、迅お兄ちゃんの部屋に向かう。

「おじやましまーす」これは本物は必要ないんだけど形式美つてやつなの。

迅お兄ちゃんの部屋は基本的にあまり物が置いていないの。

頭が良くて、本とかも全然置いてないし、学校に行つてないのにな
んでそんなに頭が良いんだろう？

レバント、アラブ半島、アフリカ東部などに分布する。

そーっと顔を覗くとちゃんと寝てこる」とがわかつたの。

長い、腰まで伸ばした黒い髪

普段はポニー・テイルみたいに纏めていて、下手したら普通の女人よりも綺麗なの。

でも決して間違われることはない。

ううん、間違う以前の問題なの。

私が最初に会った時もそうだつたんだけど、迅お兄ちゃんはそれこそ“化け物”って言われてもおかしくないの。

うまくは説明できないけど人としての密度が違うの。

日常ではなんとかその存在か威圧かよくわからないけどそれを抑えている。

膝をつき、頭を垂れ、息をする」とすらままならないの。

一度、それを経験したからわかるの。

でも完全に抑えをなくすなんてことはまったくしないの。

違う、正確には出来ないの。

一昨日の旅館で、アルフさんに話しかけられてきた時も一瞬だけ解放したけど完全じゃなかつた。

これも不思議の一つで、たまに朝と夕方とかで、一日も経つてないのにまた迅お兄ちゃんが濃くなつているの。

密度が増えたつて言つのかな？

とにかく、不思議なことなの。

だから以前に開放した時よりも絶対に半端がなくなつているの！

迅お兄ちゃんの目を真つ直ぐに見て会話できる人も高町家ぐりこしか私は知らない。

あとはたまに話に出てくる迅お兄ちゃんの友人一人かな。

おつと、考える前に早く布団に入ひつ。

ゆっくつと毛布をめくつて私も一緒に中に入る。

うへん、やっぱ「」は落ち着くの。

お友達とか家族とかもいるけど、やっぱり一番はこの人

誰よりも圧倒的で、誰よりも弱弱しくて

誰よりも恐ろしくて、誰よりも優しくて

誰よりも気高くて、誰よりも醜くて

誰よりも狂っていて、誰よりも冷静で

常に孤独だけど私が世界で一番好きな人。

ずっと、死ぬまでこの人と共に歩み続けたい。

この人の隣で、同じ景色を見てみたい。

魔法の力を手に入れて、最近思つたの。

この力さえあれば私はこの人についていけるかもしない。

でも反面、力を手に入れてしまったことで恐れていますが

見捨ててほしくないの、この世界の普通の人じゃない力を手に入れ
て迅お兄ちゃんに“化け物”扱いされてほしくないの。

仮にされなかつたとしても、もしも私がついて行けずに遙か彼方の
先に行かれてしまったら

ギュッと迅お兄ちゃんの服を握つて抱きつぐ。

ずっと一緒に居たいの。

side out

カールよ、些か助言を願いたいのだが？

と言つても、今はカールが居ないのでこの問い合わせは意味がないのだが。

兄さんの怒り度が尋常ではない。

俺にとつて怒りは甘美なものであるが身内から向けられる怒りは好きではない。

怒っている理由はわかるのだが俺にはどうしようもない困ったものだ。

「なのは、なんで迅の膝の上で迅に朝食を食べさせているんだ？」

そうだ、今朝の布団に入つてくる行為は度々……いや、ほぼ毎日だから気にはしなかったが

既知感に襲われつゝも俺はなのはが幸せそつに箸を運んでくるので仕方なしに食べる。

そう、怒らないでいただきたいな兄さん。

不可抗力なのだ。

「兄さん、食事時なので殺氣は収めてほしい。なのはが怯えている

ぞ

「まつー?」

今この時、俺に殺氣をぶつけるのはなほにも殺氣をぶつけてくるのと同義

「お兄ちゃんなんて大嫌い!...」

「ガハッ!...」

落ちたか、兄さん

「はい、迅お兄ちゃん」

「ひむ」

やはり母さんが作った料理は美味しいな。

「ねえねえ」

「なにかね、姉さん」

俺がなのはに食べさせてもらひていると横から姉さんが話しかけてきた。

「一度、今日だけでいいから喋り方変えてみない?」

「喋り方?」

「うん。あつ、でも大きくなれるんだじゃなくてひよつだけね」

曰く、人を呼ぶ時の言い方を変えないと「う」と「う」とだけ。

俺ではなく私

お前ではなく卿

姉さんではなく姉上

その他も、多少なりとも変えないかとの「う」と「う」。

なのはや姉上、兄上を学校へと見送り私ははやての家に向かつ

旅館のお土産も渡さねばなるまいしな。

「久しぶりだな、はやて」

「一曰ぶりやな。寂しかったんやで、うちの身体を慰めてくれる處
しの曰那がおらんかつたから」

「やれやれ、以前よりも元気そつでなによりだ」

ちなみに姉上に言われた話し方をしたところ

「なんや、正にラスボスの大魔王って言われても信じてまつぐら
ピッタリやで」

とはやてに驚かれた。

余談ではあるが姉上の部屋から「絶対
発見されたが見なかつたことにした

魔迅の調教術」という本が

episode? (後書き)

次回はみんなが大好きなあのKYの登場です

episode ? (前書き)

みんな来たぜ、アースラの切り札が！！

episode ?

魔法使いの闘いが始まるのは大抵が夜だ。

今回もそのよつで私は遠く離れたビルから一人の少女の戦いを見ていた。

「なんで追つてくるの？」

フェイトがなのまへと振り返る

なのは止まらず、フェイトを見据える

「私はね、別に争つつもりはないの」

淡々と言葉を繋いでいく

「世の中には人の数だけのお話があつて、事情がある

目を瞑り、なにかを思い出すよつて喋る

「フェイトちゃんはビリーハウスのシルシードを集めの理由があるんでしょ？」

「うそ、なにかは言えないけど」

「今はそれで良いの、でもね私はフェイトちゃんとお話をしたいの」

「私にはない」

「私にはあるの、あなたがそんな悲しい日をしてる理由が知りたい
そして、お友達になりたいの……」

「友、達？」

「聞くなフェイト！ そんな暖かい田舎まりの中でのほほんと生きてきた奴なんかの言葉を聞くんじゃない……」

アルフが叫ぶ、ユーノはなのはのセリフになにかを感じたのかジッとしている。

「これは私の勝手な言い分、だからフェイトちゃんが話をしたくないんだつたら」

なのはが構え、それに習つよつてフェイトも構える

「力ずくでも聞いてないもうのー」

私もこの決闘に手を出してみたくはあるがこれは一人の闘い

無粋な真似はせん

この魂と魂がぶつかり、混ざり合い奏でるハーモニー

実に心地良い

両雄が今、正に、決着を付けるべく踏み出そうとした時

「そこまでだ魔導師、戦闘をやめなさい。自分は時空管理局のクロノ執務官だ！」

互いに構え、歌劇が終幕へと向かっていくといつ時に一人の間に男が割つて入ってきた。

いかんなあ、これは流石に

少し躊躇をしてやるわ。

三人称 side

「セシの魔導師、戦闘をやめなさい。自分は時空管理局のクロノ執務官だ！」

時空管理局、その言葉を聞いてフェイトは不味いと思つた

「アルフ逃げるよ」

「あいよー」

「逃がすかーー！」

急いで振り返つて逃げようとするフェイトだが

そこを狙われて後ろからバインドが迫る

捕まる！

この場にいる全ての人間がそう思つた。

事実、完全に避けられないタイミングとスピードでクロノのバインドは放たれていた。

バインドがフォイトに当たる直前

ゾクリッ！！

全員の背中に寒気が走り、滝のように冷や汗が流れ出る。

なにか、なにか自分等の想像も出来ない驚異に見られているかのように

次の瞬間

「あやああああああああああああああ！」

「いやああああああああああああああ！」

「ぐわああああああああああああ！」

フォイトとののはの間

つまりはクロノへと黄金の閃光が走ったのだ。

それは“通り過ぎた時の爆風”だけで周囲を破壊し、クロノをビルまで吹き飛ばし、他の人間にも少なからずダメージを与えた。

『今しあに逃げたまえ』

フェイドとアルフにしか聞こえない念話で一人は今度こそ急いで退散するのであった。

「ま、て、待つん、だ」

爆風でビルに叩きつけられたクロノはボロボロになりながらも立ち上がるが既に遠くへと去ってしまった後だった。

Side out

一言、興醒めだ。

まあ、これも一つの既知の結果だつたのだが。

だが既知だからと言つてもこれは怒るべき既知

決壊を破壊したのを確認して俺は家へと帰る

しかし、今日の一件

妹相手に言つのもなんだがなかなかに好みの女になった。

妹に恋をする趣味などないのだがアレ以上の女は我が友、はやてしかおらん。

友と言えばカールよ、卿との約束の日はいつになつたら来るのあらうな。

……なかなかこの喋り方も気に入ってきたな。

フェイタside

「アルフ、さつきのつて

私達はなんとか逃げ切って家に帰ってきた。

アルフと「」飯を食べながら一緒に反省会だ。

「ああ、多分……いいや絶対にあいつの仕業だね」

あいつ　　アルフの血のついた手のせ迅さんはの」といた。

「迅さんが助けてくれたなら迅さんは味方なのかな?」

「違うだろ? 少ししか関わってないけどあいつはそんなタイプじゃないよ」

「じゃあ敵?」

だつたうぢうしそう

「一瞬、あいつが敵だったことを想像しちゃったよ」

うん、地獄しかないね。

「それも違うと思つ、違つてほし。あいつは中立な立場だろ? ね

……余分

アルフったら自信ないね

迅さんの力見たらそいつはわかるからなにも言えないけど

「とにかく、次に備えてもう寝よー。」

「うん、お休み」

今度会つたらお礼言おひ

Side out

プレシア side

私は今、きつといの数十年といつ年月の中で一番の危機に瀕している。

「やあ大魔導師、卿も一緒に紅茶でもどうかね？」

目の前には、10歳ほどの黒い髪を腰まで伸ばした少年。

私の命を狩るも狩らぬも自由のままに出来るだらう存在

「あなた、誰よ」

「私は高町迅、友人達からは“死神”などと比喩されているよ」

高町迅 人形の報告に恐ろしい存在とあった。

なるほど、これは確かに恐怖をしないほつがおかしいわ。

「死神とは、また陳腐な表現ね」

「ああ、私もそう思つたが我が盟友が語るには『究極に近づくほど、形容する言葉は陳腐になる』らしいぞ」

「それはまた、私のような研究者とは話が合ひそうね。その盟友とやらの名前をお聞かせ願つても？」

「ヘルメス・トリスマギストス、魔術師としての彼の名だ。もつとも、彼の名はそれこそ数千と持つてゐるらしいからな。私でさえ本当の名を知らん」

「ヘルメス・トリスマギストスですつて！？」

「おや、知つているのか？」

知つてるもなにも、黄金鍊成をはじめとした禁忌の法術を作り上げた人よ。

なんでそんな人がこの子の盟友なんかに？

「それで、そこポットに入っている娘。此度のジュエルシードといやらの件に関わっているのか？」

「ええ、そうよ。この子は私の愛しい娘、生き返らせるためにジュエルシードの膨大な魔力が必要なの」

「死者復活を行うと？」

ג' נייר

「そのためにジュエルシードを集めていたのか」

「早く、愛しの娘であるアリシアを生き返らす為に失われた都アルハザードへと行くの！」「..」

誰にだって邪魔はさせない、どんな障害があるのにも乗り越えてみせる。

卷之三

高町迅は心底おかしそうに笑いを上げる。

「 さうか、アルハザードに行く気か。生憎とあの黄昏の浜辺にはそのような死者を復活させる術はない」

「なんですか、あんたなんか魔力の欠片も感じられない男がそんな待ちなさい」

今、なんと言つた？

“あの黄眉の浜辺”って言つた?

「ま、まさかと思つけども、あなたはアルハザードがなにかつて知つてゐるの？」

“創造、回帰世界・アルハザード”かつてとある愚者が生んだま

ま創造者が死んでなお残り続けた創造世界。そこは永遠の刻を永遠に刻み付けたまま残つてしまふ場所だ」

「創造？ あなたはなにを

」

「そもそも、ヘルメス・トリスマギストスをもつてすら死者復活は出来ないと言つてゐる。せうに卿は前提を間違えているのだ」

意味がわからぬ。創造？ 前提？ なにを言つてゐるこの男は。

「そこのポットの娘、死んでおらんぞ」

「なん、ですつて？」

私はこの時初めて、この死神が神の如く神々しく見えた。

episode ? (後書き)

ＫＹ、俺はお前になにもしてやれなかつた。
てなわけで、おはいんばんわ!

今回ばかりは「コホン、メインとして見ていただきたかったのはアレシアとのお話です。

意味が分かんないですよね、自分も分かんないすwww

次回は今回の話の前後を書きたいと思います。

ではみなさん、アーティスト!

episode ? (前書き)

あれだ、眠かつた。

言い訳ではないが眠かつた。

だから、今回はプレシアの一件について今後に支障がない程度に触れるぐらいしか書いてません。

2011年 4月18日 プレシアさんの席と設定をを変えました
2011年 5月18日 プレシアさんの大アルカナを変更しました

時は少し遡る

「カールか、久しいな」

私がビルの上から一撃を放つて家に帰る途中、久しぶりに感じたこの視線で盟友の存在に気が付いた。

『ええ、おひさしひぶりですね死神殿。姿を見せれぬのは申し訳ありません』

『構わん、約束を忘れていたのだつたら失望していたところだつたよ』

『無論、忘れる訳などありますまい。しかし、此度の御業には些か驚かされましたな』

「卿が驚くとは珍しい、未知でも体験できたのか？」

『いいえ、残念ながら。あなたが“運命を貫く槍”的正當後継者だつたことは素直に驚いたがやはりこれも既知だつた』

「どうか、それは私の力量不足だつたかな」

『あの槍を一割程度の力で放つてあの威力は流石の一言、いつの間にか手加減がうまくなつてらつしやる』

「これでもこの物語では普段から私の存在力を抑えてるのでな。

だが、やはりとこりか。極端にしか抑えられん。ちまちまと一劃ずつ力を上げることなどできことよ」

『ふふふ、やはりあなたは

「それで、一体なんの用だ？ 郎となれば世間話も一興だが、ただ世間話をしに来たわけでもあるまい」

『ええ、一いつぱどの話が有りましたゆえ』

「話せ」

『円卓の第九席の候補が見つかりました』

「ほう、では早速だが会いに行くか」

『御意に』

フレシア s.i.d.e

「アリシアが、生きている？」

「魂がそこに宿つておるのだ、死んではおらさんよ」

それを聞いて私は涙を流した。

「で、でも、心臓が止まつたし

』

「心臓が止まつた=死んだ、と考えるのは間違いだ。で、どうする

かな？」

私は「」の男、いいえお方に選択を迫られている。

「わかりました、その提案を飲みましょう」

「よからう、ならば卿にルーンは束縛 大アルカナは死神 占星術
は天蠍宮 田卓の第八席を与える」

「ありがたき幸せ」

「」に私は新たな居場所を見つけた。

「では愛すべき部下の為にも娘を用意めさせよう」

「お待ちください、首領閣下」

「首領閣下はやめてくれ、柄ではない」

「御冗談を、あなたほどに似合っている方も珍しいですわ」

「それでもだ、絶対に団員以外の前ではやめてほしい」

「わかりましたわ」

「ならばよし

「復活の件ですが少々お待ちくださいかしあり?」

「なにか問題でも?」

「はい、第一の娘と話を」

「ああ、そうだったな。良からず、好きにじろ」

「俺はそうしてこの場を後ににするのであった。

「聖遺物は移植はかなりの難易度だつたと言っていたな、カールよ

『ええ、聖遺物はあなたのような方でなければ人を選ぶ。そしてあなた以上に聖遺物に選ばれる人物もおられるまい、すなわちは

』

「皆まで言つたな、わかっているよカール」

『ふふふ、これは失敬。しかしやはつと言つか、やや圧倒しそぎな
のでは?』

「プレシアはあれでも多くの修羅場を通りてきた戦士だ、聖遺物が
使えなくとも匹敵するほどの力と魂は持つていて」

『確かに、あなたの抑えなしの威圧に耐えられずに塵となる程度の
魂は円卓に要りませぬか』

「無論」

円卓の騎士、現在数三名

episode ? (後書き)

短すぎたって反省はしている。

今後増やすつもりですがやはり聖遺物は移植したほうがいいのかな?

あと、一人でも円卓のメンバーとかの候補とがあつたら教えてください。

ちなみに自分で三名は決定していますwww

特に二名は絶対入れるね。

episode ? (前書き)

不覚ながらにも昨日は更新できなかつた。

反省している。

さて、そんなことよりも一々話です。

次から無印編は終盤に移つて行きますがその前に、すこしだけ。

この話は閑話できなものなのであまり見なくてもかまいません。

一応は物語に関係しています。

時系列がめちゃくちゃなので、気に入らない方は次のお話をひりぞ。

episode ?

なのはside

アースラでロンティヤさんと協力してジュノルシードを探すことを決定して、私はお家で待機命令を出されました。

だから

「迅お兄ちゃん、一緒にお風呂入るの?」

「あいつこのまま兄さんに会へられないか」

迅お兄ちゃんとお風呂に入るために必死に説得しています。

セツコ、話しが戻ったんだね。

「お母さん、一緒に入ってくれないかい?」

「あらあら、迅一緒に入ってくれないかい?」

「……わかった」

凄く泣きしてたナビも了解はとれたのー。

「なら早く入るのー!」

迅お兄ちゃんの手を引っ張つて私はお風呂に向かう。

凄く、凄く嬉しいの！

といひで迅お兄ちゃんが言ってた兄さんって
ああ、そういうえばもう一人お兄ちゃんがいたね。

知らぬ間に扱いが酷くなつてたりしている恭也だった。

s i d e o u t

プレシア s i d e

時は少し遡り、円卓の席を頂いた翌日。私は迅様から一つ力を授かつた。

「擬似的聖遺物？」

「左様、本来聖遺物とは死者の魂を喰らい強化し、己の渴望によつて成長する。しかしあ前に宿したのは魂ではなく己の魔力を源としている」

つまりは私の魔力分だけ、この聖遺物は強化されているのね。

「一応は、非殺傷設定もできなくはない」

「それはありがたいですわね。殺傷設定しかできないんだつたら管理局に印を付けられてしまうもの」

「だらう、氣をつけてもらいたいのは、それは複製ゆえに己の身体をそこまであげられん。と言つてもお前はかなりの魔力を有してい

るのであまり心配はなさそうだがな

「お言葉ですが、身体の強化とは？」

「知能以外の身体機能全ての上昇、対物、対魔、環境適応能力、毒物、全てに対する抵抗があがる。今のお前ならば鉄砲程度なら痛みすら感じないし効かない。全うな手段で倒そうとしても地球の戦車の砲撃を直で当たつて、ようやく傷を少々追わせられる程度、しかもその上に、バリアまで張れる」

なによそれ、ほとんど最強じゃない。

「……この力を使用するに対する反動は？」

だがそれほどの力だ、私がもらったこの聖遺物には反動があるはず。

「ない」

だが迅様の口からは私の予想に対する否定の声が放たれた。

「それは火力や広範囲という意味では低いが、代わりに応用性が広い。プレシアにはつけてつけの武器だと思ったが」

「いえ、性能の不満や活用性の話ではなく。使用するにあたりの反動は？」

「ない。聖遺物を宿することで起きるデメリットは強いてあげるならば痛みに鈍くなり、死に対する恐怖がなくなってしまう。死に対する恐怖がなくなってしまう。それと聖遺物を破壊された場合はプレシアは己の魔力で動いているので戦闘はおろか一切の行動ができる

くなる

それだけ、それだけなんて反則も良ことじりじやないよー。

「病気も治つていのはずだ、これからは己の魂に恥じぬ生き方をし
る」

「はっ！ ありがとござりますーー！」

ああ、この死神殿はなんと神々しい。

良いでしょ？ 私の全てをあなたの為に振ります。

フレシアの忠誠度は上がつて行く。

s.i.d.e o.u.t

f.H.I.T s.i.d.e

「あ、あの、お母さん」

「あら、帰ってきたのフハイテ」

私は今、お母さんのところにジュエルシードを届けに来てこめた。

「これが今までの分です」

「わ、わ、」「苦勞様」

そっけなく答える母むふ。

あれ？ こつもとなにかが違つ。

「なにか甘い匂いがしていいんだけども、なにか食べてきたのかしら？」

わ、渡せ。」

初めて作つてみたから味は自信がないけれども

「これ、ケーキを作つてみたの」

テレビでやつてたのを見て、お母さんにも食べてもういたいと思つて頑張つた。

「へえ！ ならアルフも呼んできなさい、みんなで食べたほうが絶対に美味しいわ」

「えー？」

嘘、どうせやつたんだろ？

いつもなら、『あなたが作ったものなんかいらないわー』とか言って捨てられるはずなのに。

「どうしたの、固まっちゃって。食べないのかしら？」

「う、ううそ！ すぐに呼んでくるねーー！」

なにがあつたんだろう？

フロイトの疑問は積もるばかりである

Side out

episode ? (後書き)

どうでしたか？

話の流れとかがめちゃくちゃですが怒らないでください。

次回はちやんと作ります。

今回はフレシアセヒツヒの質問がありましたのでこの場を借りてお答えします。

Q、円卓の九席はザザミルですがやはり聖遺物もそうなんですか？

これにつきましては違います。

基本、聖遺物は原作のものを使いたいとは思っていますが席番で判断されないでください。

円卓のことは物語の本編と同時進行で進めています。そのため、お

ります。

誰の聖遺物を誰に渡すかなども自分のイメージと皆様からの意見などを参考にさせていただいております。

ではじめのことで、皆様また次回お会いしましょう！

episode ? (前書き)

いつも、おはようばんわ。

春休みの部活が今回の地震でなくなつたと困ったのに、まさかの再開

体中が筋肉痛ですごく痛いつす。

そんなこんなで第十一話、始まりますー！

episode ?

なのはside

「フェイトちゃん！」

私がアースラのブリッジに着くとモニターにはフェイトちゃんが竜巻が吹き荒れている海の上で必死にジュエルシードへと向かっていた。

大変なの、はやくいかなきや……

「あの！ 私急いで現場に

」

「その必要はないよ

だけどクロノ君に止められたの。

「放つておけばあの子は自滅する、仮に自滅しなかつたとしても力を使い果たしたところで叩けばいい」

「でも……」

「今のうちに捕獲の準備を

「了解」

なんて酷いことを

「私達は常に最善の選択をしないといけないわ。残酷に見えるかも
しないけど、これが現実」

分かつてゐる。

リンディさん達の選択は間違つてなんかいないの。

でもね

「ユーノ君！」

「ああ、任せてなのは…」

私は、私の魂はそんなことを認めてないの…！」

「『めんなさい。高町なのは、命令を聞かず行きます！』

待つててね、フェイドちゃん！」

Side out

三人称 side

なのはがアースラから飛び出すとほぼ同時刻

もう一つの異変が起きていた。

「ほひ、多いな」

フェイト達から離れている海上では百を超える人間が海鳴りの街へと進行していた。

「……」そのままいけば彼女らと出会つてしまつが

ならばよろしい。

「お見せじよう、我が形成を」

両手を広げ己の形成の名を唱える

「形成 運命切り裂く死神の鎌」

両の腕に鎌が現れる

黒い表面には紅い数本の線が刻まれており、それが鎌の恐ろしさを強調していた。

「ジュエルシードとやらを求めるのは結構だが英雄の資格なき者らにはこの物語からの退場を願おつ」

そつぬき迅は虚空へと飛び出す

そのままの勢いで海面に着地すると同時に“駆け出す”

決して低空飛行などではなく文字通り駆けているのだ。

原理は単純解明、片足が沈む前にもう片足を踏み出す。

それをただ単に行なつてゐるだけ。

だがその行動だけで分かる

この男が既に入外であると

海面から飛び上がり迅は空中にいる人の群れへと斬りかかった。

この鎌はギロチン

ゆえにギロチンが斬ると欲する部分は一つ

両手を横に薙ぐと一気に十人の首が跳ねられた。

「いのよつな」とは前座にすらなりと、わざと終わらせるとじよ
う

死神はその鎌^{ギロチン}を振るい続けるのであった。

Side out

なのはside

私はアースラから転送されると空から自由落下していく。

仰向けの状態で落ちながら、段々と遠くなつていく青い空を眺め呟いた。

「いくよ、レイジングハート」

あの日、私が魔法に初めて関わった時の言葉を紡いでいく

「風は空に、星は天に、輝く光はこの腕に」

田常から、非田常へと変わる切っ掛けとなつた言葉

でも私は後悔なんかしていない。

「不屈の心はこの胸に！」

体を光が包み込んで、バリアジャケットへと姿を変える。

結界内へと入り込むとアイトちゃんとアルフさんがいたの。

「アコイドの
邪魔をするなああああああああ！」

アルフさんが私に突撃していく。

だけど私達の間に割り込むようにユーノ君が現れて、シールドを張つて守ってくれたの。

「違う、僕達は君達と戦いにきたんじやない！」

「ユーノ君！」

タイミングバッヂなの！

『馬鹿な、なにやつてんだ君達はーー。』

アースラからはクロノ君の声が届いた。

「私は、私の魂に従つたまでなの」

純粋に助けたいと思った。

そう強く思ったからこそ、私はここに来た。

「まずはジュエルシードを封印しないとマズイとなる」

ユーノ君はアルフさんから離れて竜巻の方へと向かつ。

「だから今は、封印のサポートをー。」

バインドを出して、竜巻の動きを封じる。

ふえええ！ ユーノ君、竜巻を捕まえるなんてすごいのー！

「フロイトちやんー！」

内心で驚きつつもフロイトちゃんの真横に降りる。

「手伝つて、ジュエルシードを止めようー。」

レイジングハートから私の魔力をバルティッシュに送つてパワーを回復させてあげる。

「二人できつちつ半分こ」

だから今は、一緒に頑張ろう。

竜巻のところではアルフさんもバインドを出して、ユーノ君のお手

伝いをしている。

「ユーノ君とアルフさんが止めてくれてる、だから今の内に一人で
セーので一気に封印……」

フェイトちゃんから離れて、レイジングハートを構え

「デイバインバスター、フルパワーいけるね？」

レイジングハートを竜巻の中心へと向ける。

「せーの！」

合図をしてレイジングハートを振りかぶつて

「サンダアアアアアア」

「ディバイイイイイン」

二人同時に放つたのだつた。

side out

なのはとフロイトの間に青い光が柱となつて現れた。

その光の柱の中にはジュエルシードが5個あつた。

そう、5個しかないのだ。

発見されていははずのジュエルシードは6つ

ではあと一個はどこに？

現場に居た、全員が戸惑つて居た時

「 「 ハー... 」 」

なのはとフロイトに左右から一匹の水の龍が現れて一人を飲み込もうとしてきた。

突然のこと二人は反応できずに固まっている。

二人だけではない。

アルフもユーノも、モニターで見ていたアースラの人間たちも全員動けずについた。

誰もが食われる、そう思った

しかし

「やれやれ、やっぱり詰めが甘いわね」

誰か、女性の声がしたと思つたら、巨きの龍を雷が貫いた。

「まつたく、こいつなる前に報告べらばにはきなさい。フロイド」

やつてきたのは、かつて大魔導師と呼ばれた女性、プレシア・テスタロッサだった。

episode ? (後書き)

昨日更新した話と一部関連はありましたが、気にしなくても結構です。

円卓のメンバーの件についてのお話なんですが、現在皆様からの意見で特に多かったキャラたちが最有力です。

ちなみに誰とは言いませんが、ブレシアさん以外の四名の候補が結構あがっています。

聖遺物（武器・形状）などに関しても意見をお待ちしております。

ではこの辺で、また次回にでもお会いしましょう。

なんとか一昨日の分は取り返した。

話が強引すぎたりしましたがこれは今度外伝的な感じで書きたいと思ひます。

4月6日、時間軸がずれていたので少々編集をしました

epilogue & prologue?

皆に聞いてほし」とある。

俺が海上で百人を相手にして帰つて寝ている間にジュエルシード事件が終了していた。

納得がいかないと言えばいかないが、プレシアが介入した時点で物語は終了していただろうことは明白だ。

「で、お前が言い訳をして誤魔化したと？」

「ええ、なんとか」

朝早く公園で、プレシアと秘かに会つてことの顛末を聞いていた。

「アリシア復活のための『魔力はジュエルシードから抽出して、プロジエクトFについてフェイト出生の話をしましたら艦長のリンディ・ハラオウンが本局への』まかしまで入れてくださいましたわ」

「それは重複、問題はなにか起きたか？」

「いいえ、強いて言つならば娘が一人になつて忙しくなつたぐらいですわ」

「そつか。さて、では俺は行くとしよう

「はい、私はこれからミッドチルダまで行きます」

「わかつた、来る日に向けて力を蓄えておけ」

「御意に」

フレシアの足元に魔方陣が現れてどこかへと消えてしまった。

だがそんなことも気にせずに俺は歩く。

三人称 s . i d e

「いりつしゃい」

「いりつしゃい」はハ神邸、今日ははやての家に泊まりにきたのだ。

「どう？ 既知は壊せたんか？」

「残念ながら、そつそつ簡単に壊せるのならばとつへりやつてこるよ」

はやてと食卓を囲みながら悔しそうに話す迅

「しかし「い」は落ち着く」

「なんでや、普通自分の家の方が落ち着かへん？」

「そうでもないのだ、存在の力を抑えるのは存外に難しくてな。少々疲れる、その点ここでは抑える必要がない」

「ははは、でもお客様が来たら「断る」まあ、構わへんか

諦めたよつた表情で頑垂れるせやで

だが内心では「じるが迅にひとて落ち着く場所だと言われて嬉しきの
だ。

「これで既知を断てたら、もつと最高な気分になれるといひやう。

「その通り、約束の日が来るのを待つてこりのだよ」

はやてと迅は呑氣に世間話をしながら食事をするのであつた。

side out

なのは side

今日は迅お兄ちやんが居ない。

もしかしたら明日も居ないかもしれない。

フュイトちやんと友達になつて、のべまつりの間に、幸せな気分だった
のに一気に落ちた。

あの日、プレシアさんと野暮用とか言つてしまつりへ見つからなかつ
たから焦つたけども

そんなことよりも迅お兄ちやんが居ないと寂しこの…！

お父さんもお母さんもお姉ちやんもお兄ちやん達に対して放任主義
と眞づか、信用しきつてこるとこつか。

恭也のお兄ちゃんが怒るといつてお泊りだ。

別にいいでも良いけど。

お母さんが迅お兄ちゃんから電話された時の会話を聞くにもしかしたら明日も居ないかもしない……

「そんなの嫌なのー！」

私は迅お兄ちゃんの布団にへるまりながらジタバタする。

最近、ユーノ君とかが常に近くにいたし。アースラでの待機も多かつたから全然迅お兄ちゃんと会ってない。

「ここやあああ、残り香だけじゃ我慢できないよー」

早く、早く会いたいよー。

side out

はやで side

食事も終わって、うちの部屋で一緒にゲームをして、もつすべ寝ようと考えていたが大事なことを忘れそうになっていた。

「ついで風呂にまだ入つとらへんー！」

これは由々しき問題、衛生的ないとせしつかりせなかん。

でも、一人で入るのも寂しいしな～

「てなわけで迅、一緒に入る?」

「どうこう訳か分からんが……ふむ」

迅は私を横抱き、こわゆるお姫様抱っこをして歩き出す。

「よからい、我が友の頬みならば聞いつではないか」

なんや? 言いつたうちが恥ずかしくなつてしまつた。

だけども、それで迅と一緒に入れるんやつたら構わへん。

「いいは……」

おお、迅が興味深氣に見とる。

「いいは我が家が誇る、天然温泉浴場や!..」

田の前には緑生い茂る庭、上下左右正面はガラスで守られておつて
雨の日も風景を楽しみながら入れる。

しかも風呂の大きさも結構広くて、温泉なみにあるはずや。

行つたことがないからわからへんけども。

恥ずかしいけどもうひとは迅と身体を隅々まで洗いつこじ（別にエロ
イ意味やあらへんでー）、夜景を楽しみながら風呂に浸かった。

「今日は星が綺麗やな」

「ああ、そうだな」

身体を伸ばし、コラックスをしながら夜空を眺める迅に背中を預けるようにしながらうちは一緒に夜空を見上げる。

なんや、こうしているとカップルみたいや。

ふふふ、せやな。

今は親友やけど男として迅を狙つてみるのもええかもな。

この時、私達はまだ知らなかつた。

寝室で一冊の魔導書が起動し、守護騎士達が主不在で大慌てしていることを。

新たな物語は既に始まっていた。

e p i l o g u e & p r o i o g u e? (後書き)

A、S編に突入です。

メインヒロインを実は決めていなかつたりする自分

sts編からでも間に合つからまだまだ余裕なんですかどもね！！

episode ?? (前書き)

いつも昨日振りです。

いつも通り朝起ですが最後までお付き合いくださーい。

はやての体を拭いてあげ、着替えをせかし抱き上げる。

「いい湯だつたな」

「ん、んつかなーーー」

びうしたのだらうか、はやての顔が赤い。

「しかし、泊まつに来るところのものもなかなかに楽しきものだ」

「ほんまかー?」

「ああ、友と一緒にこらへのは既知であれ楽しもものだ」

そつかそつかと嬉しきり笑ひはやで。

そんなはやてを見て和みつづベットへ寝かして俺も隣でお邪魔をする。

「あ、もう十一時や

「思つていた以上に夜更かしをしてしまつたが、そろそろ寝るか

「駄目や、まだうひとの愛の眞みがまだや。夜はなが「寝よつかなんや、」の無視された時のゾクゾクする感じは?」

新たな自分との邂逅を果たそうとしているはやてを撫でて宥めてみる。

嬉しそうに笑いながら俺に抱きついてきて、しょうがないと思つて
いるとはやての後ろ。

怪しげな本が浮かび上がっていた。

「とこりで、あれはなんだね？」

「本が浮かんぶるー？」

どうやら知らないようだ、破壊してみるか？

そう思つていると本が自分を縛つている鉄の鎖を破壊して開いた。

魔方陣が現れて部屋は光に包まれる。

もしものことを考え、何の力も無いはやてを俺の後ろに持ってきて
庇つ。

光が収まるべットの下で片膝をついて、まるで王に仕える臣下の
ような態勢でいる四人に気が付いた。

「……友人かね？」

「へ？ おわ、誰やあんたらーー！」

突如現れた四人組、だが心なしか顔が青い。

ああ、なるほど。やつらが力を抑えてなかつたな。

俺は四人が喋れる程度まで力を抑える。

「だ、誰や、あんたたち」

「我らヴォルケンリッター、闇の書の守護プログラムです。」

代表して、一番前にいるピンクの髪の女が答えた。

「じつやら敵意はないそうだし、はやこの身になにかあればこいつを殺せばよいか。」

「はやて、俺は紅茶でも持つて来よつ。俺が居ると話しこそつりしな」

事情はあとで聞けば良い。

そそくわと部屋を出て紅茶を取りに行く。

今度こそ、既知を脱出できることを願つてこるよ。

はやて side

昨日の夜、現れた四人は闇の書つて書つ本の守護プログラムらしいや。

リーダーのピンクの髪の子がシグナム

ハンマーを持つた赤い髪の子がヴィータ

優しそうな金髪の子がシャマル

犬にもなれる青っぽい白髪の子がザフィーラ

この四人が闇の書の守護プログラム、ヴァルケンロッター

魔法とか意味がわからへんけど、そりらしいんや。

んで、その四人なんやけど今じつは面白ことになつてゐんや。

家の腕の中で震えあがるヴィータを撫でながらその光景を見ている。

「迅、抑えてくれへんか？」

「断る、昨日も言つたがここにで抑えることは断じてしない」

困つたもんや、迅は有言実行やからな。

「なあなあ、お願いや。そんな距離でシグナムとお茶だなんて、下手したらシグナムが再起不能になるで？」

「構わん、こやつがどんな存在であれ仮にも我が友を守護すると言つたのだ。“英雄”の魂を持っていなければはやてとは釣り合わんよ」

なんかつか、迅に凄い高い評価を頂たいとる。

「でもなあ、机一枚挟んだけで初対面の人間が迅とお茶を飲めると思うか？」

「無論、お前こそ俺に会ったその日にセクハラをしようとしたではないか。それこそ出来ると思うか？」

「出来るやろ、シグナムにだって会って一時間もしないうちに胸を揉んだやろ」

「せうだつたな、俺の目の前で唐突に揉みだしたな」

「な、頼む。あまりにも四人が可憐そつなんや」

うちの腕で震えているのはヴィータ

シグナムは迅と机を一枚挟んで面と向かってもうてるし

そのシグナムの後ろではザフィーラが犬の状態で震えとつて

うちの後ろにはさりげなくシャマルが隠れている。

そんな迅に怯えなくともええんとけやつ？

最初はうちもビビったから気持ちはわかるけど、悪い奴ではないんやで。

「仕方がない、友がそこまで頼むのなら癪だが抑えさせてもらおう

力を急に抑えたせいか、四人が一斉に息を吐いた。

「ほら見てみい！ 四人ともこんなに我慢してたんやで……」

「それは魂が弱いからだつこ」

「迅のそれに耐えられるのなんてそいつおひるんわー。」

まつたく、迅は駄目やな。

「大丈夫かみんな？」

「うちはみんなを見渡しながら聞く

「な、なんとか」

「少々、時間をいただきたい」

「怖かつたよはやてちやへん！」

「私も怖かつたよー！」

上から順にシグナム、ザフイーラ、シャマル、ヴィータ

全員冷や汗たらして涙目や。

で、こんな状況を作った本人は優雅に紅茶などを飲んでる。

はあ、混沌や

side out

なのは said

「迅お兄ちや～ん」

なんとなく呼んでみた。

「の家に今はいない兄の」とを考へて、「

今日は学校がお休みで、朝からずっと迅お兄ちゃんの部屋にいる。

枕に顔をつづくめて匂いを嗅ぐと落ち着く。

はあ、どうしてるんだろう？

なんか友達の家とか言つてたけど友達ついていたんだ。

それが本当なら、その友達つて凄い人なの。

そつ言えば、この最近のお兄ちゃんのこと知らないな。

私の“迅お兄ちゃん観察日記”も毎日書いてるとはコレ家でのことばつかだし。

写真もお金がなくてメモリーカード買えないし、盗聴器とかあればその友達のこととかもわかるかも知れないの。

今度、買つてこようかな？

「ああ、お兄ちゃん帰つてきてほしいの……。」

バタンバタンと迅お兄ちゃんのベットで跳ねる。

「ただいま」

あ、この声は、この感覚

「迅お兄ちゃん……」

急いで部屋を飛び出して、階段を駆け下りて、玄関にまだいた迅お兄ちゃんのお腹にダイブした。

「昨日振りか、なのは」

「うそ……お帰りなれど……」

ふこやああ、やつぱつ生は全然違うよ。

ああ、このお兄ちゃんの元気…………い？

あれー? お兄ちゃんから女の人の匂いがする……

「母さん達は?」

「ふえ! ? えっと、お兄ちゃんは忍びさんの家に行っていた、お姉ちゃんは友達と遊びに、お父さんとお母さんは翠屋にいるの」

「私が、なじまじのね十種せんが歸つてから食べるとこみつ

私は迅お兄ちゃんに抱きついたまま一緒に移動する。

この匂い、嗅いだことがないの。

誰だ？

不愉快だ。

「迅お兄ちゃん、一緒にお風呂入る?...」

「まだ匂なのだが」

「良いのー。沸かしてくるねー。」

他の女の匂いなんて迅お兄ちゃんからしてほしくない。

だから私が洗い落とそう、迅お兄ちゃんからして良いのは迅お兄ちゃんの匂いだけなんだから。

side out

episode ?? (後書き)

おこおこ、どうじょうか？

ありがたいことに感想が二十件を突破いたしましたー！

皆様、本当にありがとうございます。

些細なことでも良い、お気に入り登録しましただけでも良い。それが原動力となつてひつして書き続けられるのです。

あと、今朝の話なんですが。

他の作者様の文などを参考にさせていただくために“魔法少女リリカルなのは”のタグをクリックしました。

PCからなのですが最初は週刊ユニーク数が多い順で表示されるのです。

そうしたら、一ページ田の一一番下にこの作品が…！

思わず驚愕してしまいました。

いやあ、嬉しいですね。

でももつと上のほうにある方達つて……凄いですよね。

トップページになると余裕で1万超えたりしてて、文を書いてい

る鳥としてはどんな秘訣を使っているかわかりません。

純粋に面白さの差だとは分かっているんですけどもねーーー！

……頑張りう。

皆様から「」意見、「」感想お待ちしておりますーーー！

episode ?? (前書き)

更新しました
www

俺は学校には行っていない。

だからと言つて、頭が悪い訳ではない。

むしろ、大学レベルの問題ですから解けると自負している。

そんな俺は日中、仕事がある。

高町家は数年前、俺を拾ってくれた大恩のある家だ。

それまでは公園でカールとの念話などで時間を潰していたが、ここに来てからはそれなりに有意義な生活を送っている。

ハ神はやてといつ“英雄”としても“友”としても認められる魂の持ち主にも出会えた。

聞けば、一人で数年も暮らしており足も悪い。

聖遺物を譲渡すれば多少は改善されると思うがどうしてか、気分が乗らなかつた。

なので俺は家に遊びに行き、出来る限りの時間を使くした。

それに一昨日は誕生日だったので、プレゼントまで作つた。

ふむ、カールによく女に甘いと言つていたが俺も人のことは言えま

いな。

些か、話がずれた。

俺の仕事とは厨房にいることだ。

料理が出来ない訳ではないが、基本的には作らない。

俺の聖遺物、数十万の魂を吸つたせいか使用者の俺までもが圧倒的な存在感を出してしまっている。

抑えることができるのが幸いだらう。

そして、父ちゃんと母ちゃん。

高町士郎と高町桃子は俺のそこには着眼した。

厨房で人に害をなさないほどの中存在感をだす。

難しかつたが、やつてみせた。

表には出ずに、厨房でのんびりと読書をする。

存在感のおかげで、店の存在感があると勘違いして入ってくるお客様を狙っているのだ。

効果のはじは重畠、味は美味しいために評判もいい。

話を聞けば売り上げが三割増し

この程度で恩が少しでも返せるのならば、いくらでも協力しよう。

はやての家にはヴォルケンリッターもいるので心配はない。

今日は読書ではなくのはと話している。

はやての家に泊まりに行って会えなかつたのが寂しかつたのか昨日からベツタリだ。

兄離れはいつになることやら。

シグナム side

「主はやて、聞きたいことがあるのですが」

「なんや?」

私は闇の書の守護管理プログラム、烈火の将シグナム
ヴォルケンリッターのリーダーである。

「昨日のあの人物は誰ですか?」

昨日の、あの対面するだけで魂が塵となりそうなほどになつた人物恐ろしい話だが、主との会話を聞くに敵意を見せてない自然な状態での威圧感だったのだ。

「あれはうちの親友、高町迅つて人や」

高町迅、やがてある御方なのだ。

「別に迅はみんなに敵意があるわけでもないで、だからそんなビビの必要はあらへん」

無茶を言わないでいただきたい。

この主に不満があるとすればこれもその一つだ。

だがそれは無茶であるが嫌な嫌悪感を抱くものではない。

我らを物ではなく家族のように扱つてくれる。

シャマルビゲイータは一皿で寝てしまった。

悪いことではない。

今までの主はほとんどが私達を道具扱いだったのだ。

今回の主ほど優しい方は一人目だ。

「まあ、無茶つてのは少しだけわかるで」

少しだけ……でも主はやはては確かに平然としていらっしゃったし。

「あの威圧に耐えるのことは条件があるんや」

「条件……ですか？」

「せや、言つのは簡単やけどやるのは難しいで」

なんなのだそれは一体？

「魂を強くせなアカソ」

「魂をですか？」

「そいや、精神力が強いんやなくて魂や。それこそ迅が英雄と認められるほど魂を持つておらんかつたら耐えられへん」

「では主はやはては彼に英雄と認められたのですか」

「ああ？ それはわからんんけども友としては認められてると思つで」

それは英雄と認められるより難しいのでは？

そつ思わずにはいられなかつた。

Side out

episode ?? (後書き)

話の続きがかんがえられない。orz

episode ?? (前書き)

どうも、十五話田です。

前回からかなりの月日が開いてることになっていますがお嫌いにならなかつたら見て行ってください。

episode ??

とある日の夜、俺のところに急な念話が入った。

「『迅様、少々よりしこでしょつか?』『

「『』の声は……フレシアか、久しいな『

懐かしい声、半年振りになるな

「『はつ、ただいまアースフロント地球の衛星軌道上へと着きました』

「

「『わかつた、報告』『苦勞』』

衛星軌道上、つまりは宇宙に居るのか。

「『ありがたきお言葉です……と』『お聞きしたいことが』『

「『なんだ?』』

「『はつ、私が頂いた聖遺物のことに関してなのですが

なのですか?』』

「『ほつ、良く半年で気が付いたな』

珍しく、嘘をついたのだが

やはり慣れない」とはするものではないな。

「『『』』これでも研究者の端くれのなので……では、先程の質問の答えは『』」

「『『』』やせうだ』」

「『『』』やはりでは私も集めた方が?』」

「『『』』いや、良い。それをやると田を付けられてしまつ可能性があるのでな。まだ、時期がはやい』」

「『『』』御意に』」

セレジアの氣配が消える。

一方で、家の近くでは戦闘の氣配がしてくる。

ヴィータとなのはか?

結界も発動してくるよつだし……ふむ

俺は田を瞑り、意識を集中させる。

すると、戦闘現場の様子が見えてきた。

カールに遠見の魔法とやらを教えてもらつておいて正解だったな。

۱۷۶

なのはどヴィータは突然起こつた異変に戦闘中だが硬直してしまつた。

誰かに見られているような、そんな感じだ。

気味が悪い、その気持ちが両者の胸を支配していた。

「アーヴィングの野獣」

得体のしれない恐怖に、ヴィータははやく蒐集をして帰ろううとなのはを吹き飛ばしに掛かるが

「話を聞いてつてば……！」

「ディバインバスター』

۱۷۸

なのはのデイバインバスターがヴィータの横スレスレを通過する。

その時の風圧のせいでウイーダの帽子は飛ばされてしまつた。

地面へと落ちていく帽子を見て、ヴィータの瞳孔が開き、心は怒りで一杯だった。

「グラーフアイゼン、カートリッジロード！」

「えっ！？」

グーラーファイゼンから火が噴き出て、ヴィータの速度を速める。

「ラケーテン」

なのはは次第に追いつかれてしまい、魔方陣で防御するもいとも簡単に破られてしまった。

それだけではない、相棒であるレイジングハートも攻撃を受けてしまいヒビが入る。

なのはは吹き飛ばされてしまい、ビルに叩きつけられる。

「ええええええええええ！」更に追い打ちを掛けに行くヴィータ

「『プロテクション』」

レイジングハートはボロボロになりながらも己の主を守りつゝバリアを張る

「ぶち抜けえええええ！」

「了解」

しかしながらそんなレイジングハートの頑張りも虚しく、数瞬の拮抗の後に破られてしまいなのはのバリアジャケットの一部ごと吹き

飛ばしてしまった。

「ハア ハア ハア ハア」

やつと終わった、はやく蒐集してこの場から去り、
段々と冷静になり始めたヴィータは蒐集をするためになはへ
と近づいていく

それに対してなのははボロボロの体で、同じくボロボロになつて
るレイシングハートを向ける。

それを戦意と認めてかはわからぬがヴィータはゆっくらとグラー
ファイゼンを振り上げる。

s i d e o u t

なのは s i d e

いつそ時が止まればと思つ。

この日常が、家族や友と過ごしていく日常を

変わらない日常を求めるため。

遠くにいつてしまった友達や仲間と一緒に過ごすことを楽しみに
していた自分

そのまま時が止まってしまえばいい。

だけど現実は残酷で、田の前では私を殺そうとしている女の子が居た。

「（）」こんなので、終わら？）

知らない。

そもそも私は、こんなところでも、まだ死ぬはずじゃないから

そして振り下ろされるハンマー

私を倒さんと、明確な敵意を持つて振り下ろされる一撃に私は瞬きする。ことすくできず、呆然とそれを見つめた。

そして、私の物語に奇跡（お約束）は起じた。

鈍い金属音が響き渡る。

私と赤い髪の女の子の間に割って入ってきたのは私の良く知っている金髪の女の子

「（）」なんのは、遅くなつた

肩に手を添えられる。

そこにも私の良く知っている子が居た。

「ユーノ、君？」

あれ、でも時空管理局の本局にいるんじゃないの？

「仲間か？」

鍔迫り合いになりながら赤い髪の女の子は問つ。

一旦距離を置いて、金髪の子がデバイスを相手に向けて言った。

「友達だ」

助けに来てくれたの子の名前はフェイ・テスター・ロッサ

半年ぶりに会った、私の友達だった。

side out

episode ?? (後書き)

感想お待ちしております

e p i s o d e ? ? (龍書き)

なんとかこの日の投稿は間に合つたな。

でも急いだせいで、色々色々な内容だし見直しもしていない(汗)

episode ??

それは、小さな願いでした。

望んだのは静かな日々

待っていたのは、遠く離れた友達との再開

だけど、訪れたのは突然の襲撃者

出会い、戦い、大きな力

運命が、今、静かに動き始めて

嵐の中でも心を繋げた絆を信じて

魔法少女リリカルなのは A · S · ~ 疾走する聖遺物 ~ 始まります

戦闘現場 side

なのはが吹き飛ばされたビルの中でヴィータとフェイトは互いに武器を構えたまま向き合っていた。

「民間人への魔法攻撃、軽犯罪ではすまない罪だ」

「なんだテメエ、管理局の魔導師か?」

だつたのならば、ヴィータはマズイことになると考えた。

今更だが、闇の書は一級指定のロストロギア
今までの主ならともかくとして、今回の主
ては優しい

はや

自分たちを道具ではなく家族として扱ってくれる。

もうひらん、自分たちははやてが大好きである。

そんな人を管理局なんかに奪われたくない。

それに、もしも闇の書を奪われてしまえばはやての脚は一生治らな
いかもしない。

もしかしたらだが、あの死神がなんとかするかもしねりないが

とにかくだ。

ここつが管理局だったら逃げるしかあるまい。

一瞬のうちにこれだけのことを考えるヴィータ

「時空管理局、囑託魔導師、フュイト・テスター」

フュイトの名乗りで自分の予想が合っていたことを確かめると急いで、ヴィータは逃げる算段を考え出す。

「抵抗しなければ弁護の機会が君にはある。同意するなら武装を解

除して!」

「誰がするかよ!」

ヴィータは後ろへと飛び、ビルの外へと出ると急上昇をする。

「ユーノ、なのはを任せた」

それをすぐさまフュイトは追つた。

side out

バイータ side

二人は上昇するとまたも互いに睨みあつて止まった。

「（あつ、このまま帰つたらわざわざ相手に居場所を教えることになつちまつ）」

幸いなことに、もう一人の魔導師からは引き離したものとの魔導師もさつきの白い魔導師と同じぐらいの魔力を持つてゐる。ついで前の黒衣の魔導師

しかもこいつの方が実戦経験豊富そうだ。

厄介だ、蒐集をできなかつたとしてもなんとか前線から引かせるぐらこのことをしなければ管理局にはやが見つかつちまつ。

「バルティッシュ」

「A r c S a b e r」

黒い魔導師が金色の魔法刃を放つてくる。

「グラーフアイゼン！」

「Swall o Flier」

私はそれに対して四つ

ビー玉サイズの鉄球をアイゼンで打った。

「障壁！」

鉄球は魔法刃を狙つたわけではなく、その横を通り過ぎるように通つて直接魔導師へと攻撃するために向かつ。

魔法刃を障壁で守りながら追尾させる。

「バリアアアアアア」

コントロールに必死だつたせいで、下から迫つてくるやつに気づくのが遅れちまた。

「ブレイクウウウ！」

なんとか防いだが、かなりきつい。

それに黒い魔導師の方を追つていた鉄球も自滅しちまつたし

障壁にヒビが入る。

なんとか意地で相殺させて、相手が怯んだところをアイゼンで殴りにかかる。

相手は障壁を張るも、それごと私は叩きつけてしまった。

その瞬間、横からくる一撃に気づいた私は急いで上昇をする。

間一発でその一太刀を避けるも更なる追撃で一撃を貰ってしまうになるがアイゼンでなんとか受け止めた。

「（ふつぶすだけなら簡単なんだけど、それじゃあ意味がねえんだ）」

もどかしさを感じつつも私は田の前のことに集中する。

「（魔力を持つて帰らないと
り一発、やれつか？）」

カートリッジ残

side out

「ヴィータ、捕えられたか

空中で手足を魔法で固定されてしまったヴィータ

「終わりだね」

フェイトがバルディッシュの先を向ける。

「名前と出身世界、目的を教えてもらひつよ」

管理局……法を守る警察のような組織だったか？

その役、なかなか板についていると思ひだフュイトよ。

だが、甘い。

フレシアにも言われてたであらひ、詰め甘いと。

「く、くう
！」

ヴィータが唸りを上げる。

「なんかやばいよ、フュイト……」

それになにか感づいたのかアルフが焦りが混じつた声でフュイトへと話しかける。

途端、急にフュイトの前に謎の人物が現れる。

「ほ、シグナムか」

いきなり現れたシグナムはフュイトへと切りかかる。

突然のことに対する反応できなかつたフュイトは当然、弾き飛ばされた。

「シグナム？」

ヴィータが不思議そうな顔をする

「うおおおおおおおおー。」

怒声と共に現れたのはザフィーラ

アルフに右のハイキックを喰らわせる。

「レガランティン、カートリッジロード」

「explosion.」

シグナムの剣から炎が噴き出していく。

「紫電一閃！」

上から吊りつけられるような一撃で、ファイトのバルディッシュを断ち
さらにもう一閃、バルディッシュがなんとかプロテクションを張つ
て防ぐもファイトをはるか上空から地面へと吊りつけられる。

「ファイトー！」

それを見たアルフは声を荒げて、ファイトの下へと行こうとするが
ザフィーラがフェイトへの道の間に入つてそれを阻止する。

「止まつー。」

歯を食いしばるアルフ、ザフィーラは拳を握つて迎撃の態勢をとる。

「フロイトちゃん……アルフさん……」

一方で、少し離れた場所で観戦していたのははそんな二人を見て心配そうにしていた。

「まざい、助けなきや」

ユーノはブツブツとにかく咳きだし、なのはを中心として魔方陣を開展する。

「回復と、防御の結界魔法。なのはは絶対にここから出ないでね」

そう言い残してユーノは一人の助けに向かう。

ユーノ、まだまだだな。

それではこの戦場での貴様の役目を果たせないではないか。

俺は静かに全員の観察を行つのであつた。

シグナム si de

「どうしたヴィータ、油断でもしたか？」

「つむせえよー！」から逆転するとこだつたんだーー！」

「さうか……それは邪魔したな、すまなかつた」

ヴィータを助けに来たのだが、はやく帰りたい。

この戦場に来てから、ずっと感じるのは視線

気味が悪い。

私はヴィータに掛けられているバインドを解く。

こんな視線を気にするよりも田の前の良質なリンカーコアを蒐集することに専念せねば。

その時、私は……いや、私達はまだ気が付いていなかつた。

この視線の意味に。

side out

episode ?? (後書き)

直すのはまた明日にじょうへ、そういうひつじつ…！

円卓メンバーのアンケート待っております。

episode ??? (前書き)

PCで書いている時のESCボタン

携帯で書いているときの『切る』ボタン

ああ、こいつらのせいで俺はこの話を短くしただけではない。

何度も様々な作品で怒りを爆発させられたことか……

シグナム si de

「だがあんまり、無茶はするな」

私は、ヴィータのバインドを解き、そう言つた。

「お前が怪我をしたら、我らが主が心配をする」

あの主は優しすぎる、もしも我々が怪我でもして帰つたならばすぐ
に蒐集のことがばれてしまい怒られるだらう。

そんなのは望んではない。

「わかつてゐよ、つたぐ、もう一つ…」

拗ねたように頬を膨らませて顔を逸らす、ヴィータ

そんなヴィータに私は思わず可笑しそうに微笑んでしまう。

「それから、落し物だ。破損は直しておいたぞ」

先程の砲撃で落ちてしまった、ヴィータの帽子を私はかぶせてやり、
頭をポンポンと叩く。

「……ありがとう、シグナム」

恥ずかしがりながらも、ヴィータは礼を言つてくれる。

やはり主はやてと一緒に暮らし始めてから変わったなヴィータ

前までならばこんな風に礼など言わなかつただなりうに。

下に視線を向けると、ザフィーラが高速で相手の使い魔と闘つてい
る。

「状況は実質3対3、1対1なら我らベルカの騎士に

」

「負けはねえ！？」

同時にお互いの相手へと飛び出す私とヴィータ

見せてやるつ、ベルカの騎士の力を！－

「あれ？ 間の書がない！？」

……見せてやるつ、ベルカの騎士の力を！－

軽く、現実逃避する私であった。

side out

フェイントside

「大丈夫？」

「

「うん、ありがとう、ユーノ」

ビルに叩きつけられた私は五階分ほど下に床を貫通して叩きつけられた。

下手したら死んでたかもしれないな。

ユーノに起こされながらも私は自分の状態を確認していく。

少しダメージはあるけど、戦闘不能なレベルじゃない。

「バルディッシュが……」

ユーノの視線を追つてみると、ボロボロになり、尚且つ一つに両断されているバルディッシュがあつた。

その片方を手に取つて、見てみる。

「大丈夫、本体は無事」

本体が無事なら私はまだ戦える。

「recovery」

バルディッシュは自己修復機能を使って、なんとかもとに戻る。

これで、大丈夫

「ユーノ、この結界内から全員同時に外へ転送、いいや？」

穴が開いた天井から空を見上げ、私はユーノに聞いた。

「うん、アルフと協力できれば……なんとか」

でもアルフは今、戦闘中だ

「私が前に出るから、その間にやつてみてくれる?」

「わかった」

友達を助けにきたんだ、やつてみせる。

「『アルフも良い?』」

「『うなことキツイナビ、なんとかするよー。』」

アルフも念話でこの話を聞いてくれていたらしく、話が早くて助かる。

「それじゃ
頑張ろっ!」

「うん!」

私達は同時に空へと飛翔する。

飛行していると下のビルにコーノの魔方陣の中からいりこりを心配そうに見上げるなのはが見えた。

待つてね、なのは

なのは side

戦場で行われてこり三つの戦い

それらを傍観しているのはは心の底から悔やんでいた。

「自分にもっと力があれば……」

そうすればフュイトちりゃん達に迷惑を掛けずに済んだかもしれないのに。

「助けなきや」

なうばせめて、自分が巻き込んでしまったみんなのことを助けなれば

「私が、みんなを
助けなきやーー！」

「m a s t e」

私のその言葉に応えるようにレイジングハートが喋りだし、姿を工
クセリオンモードへと変える。

「レイジングハート……？」

「L e t - s s h o o t i t · S t a r t - i n g t B r e a
k e r」

「そんな、無理だよ。そんな状態じや

」

「 I can be . i t 」

「あんな負担の掛かる魔法、レイジングハートが壊れじゃうよ！
それでも撃てと、自分の限界を知りつつもレイジングハートは私に
そう言ったのだ。

「 I believe , m a s t e r 」

私はあなたを信じる

「 T r u s t m e , m y m a s t e r 」

だから自分を信じろってほしい

ぐっと零れ落ちそうな涙を堪えて私は覚悟を決めた。

「レイジングハートが私を信じるのならば、私もあなたを信じるよ

レイジングハートを構えると、コーノ君が張った魔方陣は消えて、
代わりに私の魔方陣が矛先へと現れる。

「『 フェイトちゃん、コーノ君、アルフさん。私が結界を壊すから、
タイミングを合わせて転送を！』

「『 なのは……』

「『 なのは、大丈夫なのかい？』

「『 ……』

「『大丈夫、スター・ライト・ブレイカーで撃ち貫くから！』」

息を吸つて、痛む体に力を入れる

「レイジングハート、カウントを！」

[A 1 1 r i b o t]

祖先に私の魔力が高エネルギーと化して集まって行く。

Count ?

カウントが進むにつれ、系先に収束するエネルギーは密度と大きさを増す。

なにをしようか気が付いた、敵が私の攻撃を阻止しようとすると、フュイアちゃん達に止められるの。

[? ' ? ' ? ' . . .]

「レイジングハート、大丈夫？」

[No problem]

頑張つて、レイジングハート

[count ? ?]

レイジングハートを振り上げて、放とうとした瞬間

「あつ！？」

ズブリと、私のお腹から手が出ていた。

なにが起こったの？

立っているのが辛いの

意識を保つことが難しいの

魔力が吸われていって力も出ない

「count 0】

「ス、スター・ライト……」

でも、慌てる前に、意識を失う前に、辛さで倒れる前に、この魔力
がなくなる前に

「スタアアアアアアライトオオオオブレイカアアアアアアアアアアアア
アア！？」

文字通り、渾身の力でスター・ライトブレイカーを放つて結界を破壊
したの。

side out

episode ?? (後書き)

まつこ、寝ます！

はやこさだ、今日また寝るーーー！

episode ?? (前書き)

一日数話投稿だったのにいつい、忘れてしました。

学校が忙しくなったりしてるからだけど、それを言つて訳にするつも
りはない、

どうも申し訳ありませんでした。

e p i s o d e ? ?

それは小さな願いでした。

微笑みを交わし合ふこと、そつと触れ合ふこと

だけど、私達を迎えたのは戦いの時

奪われてしまつた力

傷ついてしまつた魔導の杖達

まだハツキリ掴めない、戦うべき相手と、自分たちに出来る」と。

だけど、それでも私達は

魔法少女リリカルなのは a · s 編 ～疾走する聖遺物～ 始まります

アースラ side

「救護班急げ！」

「魔力数低下、至急魔力供給をおこなつてくださいーー！」

なのはが撃墜され、アースラでは医療班が駆けまわっていた。

その喧騒から離れた、艦長室では一人の少女が頭を抱えていた。

「私の、私のせいでののはが……」

「いいえ、あなたのせいじゃないわよフェイトちゃん。これは対応が遅れた私達の責任です」

フェイトは自分が力不足だったがためになのはがやられたと思つてゐる。

「もつと、もつと私に力があれば」

フェイトのその小さな咳きは誰も、本人以外に聞こえることはなかった。

s i d e o u t

ヴィータ side

時は少し遡り

私達がいつもの場所に集まり、はやてのところに帰ろうとしたら

「 「 「 「 つーーー」 「 」

カハツ、い、息が……

それどころか立つてすら居られない。

この感覚は何度も味わったことがある。

戦う、作戦、努力、才能、勝利

およそ、戦いに関するすべての感情を奪われるような感じ

あの、あの男が近くにいる。

まさか、だつてシャマルの話でははやての家にいるって

「まあはげ」苦勞と、労つておひつか

恐い、田の前に現れたコイツが恐い

嫌な奴だと、危ない奴だとは思つてないが、これはそういう次元
じゃないんだ。

本能？ 理性？

訳が解らない。

でも、絶対的にこの男には逆らつちや 驄目なんだ。

「ああ、シャマル。なんでここに俺がいるか分からぬといふ顔を
しているな。なに、簡単なことだ。はやてがあまりにも帰りが遅い
から俺が連れ帰りにきたのだが……随分と面白いものが見れた」

私の横で跪いているシャマルに上から声を掛ける男。

「お前が貫いた相手、実は俺の義理の妹なのだ」

マズイ！

跪き、頭を垂れても辛い

しかも今回は私ではなくシャマルに向けられた言葉だ。

言葉を向けられているシャマルは一体どのよつな心境なのか……考
えたくもない。

「安心したまえ、あれは大威力の魔法を放つ時に周囲の警戒を怠り
油断したゆえのミスであった。シャマルを責めるつもりはない。言
つたであろう？ 僕ははやてに頼まれて歯を回収して来たのだ」

そこで、ようやく威圧を解いてくれた男

名前は高町 迅

正真正銘の“化け物”だ

「では、帰らうか。はやての料理が冷めてしまつ

そういうて踵を返す迅

はあ、なんではやてはこいつと友達でいらっしゃるんだろうな？

side out

俺ははやてが寝たのを確認すると部屋を出で、ベランダへと出る。
空を見上げるとそこには幻想的なほどにまで美しい星空が広がって
いた。

「ヤ」のお前もどうだね、今日は星が綺麗だぞ

「……氣配を消した我々に気が付くとは、流石と申しておきましょ
う」

現れたのはシグナムだった。

「どうやら、真剣な様子だが?」

「はい、真面目な話です」

向けられた威圧だが一切の殺氣が含まれてはいない。

「单刀直入に問います、貴方はどうの味方ですか?」

「どうりどか?」

「我らが主か、それとも妹君の方ですか?」

なんぞどな、そういうことか

「どうりでもないが、はやての邪魔をするつもりはない。仮になのはの味方であるならばあの場で全員を殺していたよ」

「どうりでもない?」

怪訝に俺を見つくる。

「ああ、そう言えばお前達にはまだ言つてなかつたか

それに対しても俺は優雅に一礼をする。

「よつこじや海鳴の街へ、夜天の守護者達よ。この街でなにをするも君たちの自由だ、己の望みを叶えるために精々、頑張ってくれたまえ。海鳴の街は君達を歓迎しよう」

この優しい世界での新たなお伽噺の始まりを告げさせるためにも、挫けずに前に進んでいきたまえ。

「夜天の守護者？ 我々は闇の守護騎士だが」

「ははは、それは已で真実を見つけたまえ」

でなければ意味がないのだよ。

シグナム side

不覚にも私は見惚れてしまった。

迅は屋根の上に居るので私は見上げることになる。

優雅に一礼をする迅は残酷なまでに幻想的であった。

背後に見える星空がまるでこの時の為に存在していたかのように煌めく

ああ、なんと美しいのだろう。

この死神は私の心を刈り取つていく。

私は徐々にだがこの死神に惹かれ始めていくのであつた。

S i d e o u t

episode ?? (後書き)

ヒロインどうすつかな?

他の作品も書いたりとだけヒロイン決めが一番難しこよつた気がするぜ。

とにかく、感想とかお待ちしております

episode ?? (前書き)

祝 100000万アクセス突破!

皆様、本当にありがとうございます。

今回は戦闘はなしです。

次回は本編を進めるかどうするかと悩んでおつまます。

episode ??

それは、小さな思いでした。

新たに始まる、私達の日々

決めたのは戦うこと諦めないこと。

誓ったのは、昨日よりもっと強くなること。

動き始めた運命に立ち向かうために。

もう一度と、大切な人を傷つけないために。

魔法少女リリカルなのは『疾走する聖遺物』 a - s 編 始まります。

三人称 side

AM 6:30 八神家 はやての部屋

朝早くに鳴り響く目覚まし、布団からモゾモゾと伸ばした腕でその音を止める。

「ん、んう」

はやては上半身を起して、まだ眠い目を擦る。

その隣では、ヴィータがこの前に買つてあげた「わざわざ」の人形を大切そうに抱きながらまだ寝ていた。

それを見て和みつつ、そつと起きなによつてベッドから降りて部屋を出る。

朝食を作るためにリビングに着くとシグナムがソファに座つたまま寝ついていた。

その足元ではザフイーラも寝ている。

「ふふ、じゃあ朝ごはんを作ろか

AM 6:41 海鳴市市街地 ビル屋上

そこではフュイトがバルティッシュを構え、素振りをしていた。

先日のよつて友を守れないことがないよ

昨日の自分よりも強くなるために

その真剣さは異様なまでに凄まじく、いつも一緒に居るアルフでさえここまでフュイトの威迫は見たことがなかった。

なのはは朝早くから公園魔で出向き、日課となつている魔法の練習を始めようとしていた。

AM 6:45 海鳴市桜台林道

両手に意識を集中して、スフィアの形成に挑むも失敗する。

「「はあ」」

近くで見ていたコーノと一緒に溜息を吐くのであった。

side out

「やはり、はやての家で飲む朝の一杯は美味だな」

「それには激しく同意するぜ」

ヴィータよ、分かつてくれるか。

例え、既知であろうとも美味しいものは美味しい

「そう言えば、迅は家に帰らなくともいいのか？」

「いや、帰るとしてももう少し」の家に泊まつて行くな

実際に蒐集の手伝いをしているのだしな。

なにかとこの家に泊まつていた方が都合が良い。

「主はやて、そろそろ……」

「あ、わかった」

はやてはこれから病院だったな。

二人はリビングを後にすると。

「では行くとするか、ヴィータ、ザフィーラ」

「おひり」

これからは一人と俺で別れて得物を探す。

俺達は魔方陣の光に包まれて姿を消した。

なのは side

私とフェイトちゃんは私の部屋で事件のことについて話していたの。

「ね、なのははあの人たちのことなどをどう思つ~。」

「あの人たちつて…闇の書の?」

「うん、闇の書の守護騎士たちのこと」

あの人たちの事か……

「えっと、私は急に襲い掛かられて直ぐに倒されちゃったからよくわからなかつたんなんだけど、フェイトちゃんはあの剣士の人となにか話してたよね?」

「うん。少し不思議な感じだつた。つまく言えないけど、悪意みたいなのを全然感じられなかつたんだ」

あれかな、お兄ちゃんとかお父さんが話してたけど

ある一定以上の実力を持つている人たちが拳や剣を交えると時に言葉よりも多くを語る

とか言ってたそれでフェイドちゃんは感じたのかな。

「そつか、闇の書の完成を図描している目的とか教えてもらわればいいんだけど」

無理だよね。

「こんな時、迅お兄ちゃんなりびつするかな？」

「話ができるそうな雰囲気じゃなかつたもんね」

せめて、お話をできれば良いんだけど。

「強い意志で自分を固めちやうと、周りの言葉ってなかなか入っこないから。私も、そうだったしね」

そうだった、フェイドちゃんもフレシアさんの為に必死にジュエルシードを集めてたんだ。

結局、それはアリシアちゃんの為であつて、管理局に事情を話して無事に終わつたけど

裁判もむづしかかるんだつけ？

フレシアさんはまだ向ひつてこゐみたいだし。

「私の場合は勘違いで終わったから良いんだ。アルフも私みたいにずっと疑心暗鬼で母さんのこと疑つてたけど今じゃあ仲良しだしね」

良かった、家族の仲は良好みたいなの。

「言葉を伝えるのに戦つて勝つ」ことが必要なら迷わずに戦える気がするんだ」

「フェイトちゃん……」

「なのはが教えてくれたんだよ」

「『口才と笑つフェイトちゃん

その瞳には強い意志を感じられた。

「その強い心を、なのはが教えてくれた」

「やあ、なんだか恥ずかしいよ。

照れてるのがバレたのかフェイトちゃんはクスクス笑いだして、私も釣られて二人で笑いあつたの。

なんだか平穏な時間、こんな時間がずっと續けばいいのに

episode ?? (後書き)

関係ない話ですが、ちょっと先日の話です。

この前、自分がとある料理店で一人で食事をしていると近くのテーブルになのはファンの方々が居ました。

二次創作も拝見しているついで、このサイトの話にもなつていまし
た。

するとする、なんとの作品のお話も出てきてるじゃないですか！

いけないとは思つてゐるんですが聞き耳を立ててゐると

『面白い』や『続かが気になる』など仰ってくれる方も居れば
『嫌い』や『物語や文の構成が甘い』や『もう少し勉強してほ
しい』などと頑張りねばと思つこと

賛否両論の意見でした。

漫画やアニメの作者ってこんな感じなのかな」と思われました。

でも見てくれている人の話つて、例え悪くても励みになります。

本当にありがとうございます。

つと、それそこにつきも通りに

最近スランプです。

オリキャラや誰に誰の聖遺物を与える、また作るなら、どんなオリ聖遺物を作るか悩んでいます。

あなたの渴望はなんですか？ 教えてはいただけませんか？

もしかしたらその渴望を持ったキャラや設定で作るかもしれません。よければ感想などをお待ちしております。

episode ?? (前書き)

すみません、スランプです。

なので、とは言つませんがかなり短めです。

申し訳ありません。

「……囮まれているな」

海鳴の街で一番高いビルの屋上に立つて、俺はヴィータとザファイアを見る。

一人の周りには武装した人間が十名近く居り、囮むような陣形をとつている。

ふむ、ここで時間稼ぎをして主力が来るまでの時間稼ぎか。

「管理局か」

「でも、ちょろいよコイツ等。返り討ちだ！」

一、二百メートル離れている二人の会話が俺の耳に届く

ヴィータが構えると同時に囮んでいた武装兵たちが一気に散開する。

「？」

ヴィータはなにが起こったか分からぬようだ。

「上だ」

二人の上には青い魔方陣があり、その近くにはいつかのフロイトと
なのはの決闘を邪魔した男が居た。

「スティングガーブレイド、エクスキューションシフト！！」

剣の形を模した魔力弾の雨が放たれる

どいつもから貫通の性質をもつていて……しかし、あの少年

攻撃に憎しみがこもつているな。

「ちいー！」

ザフィーラの盾でその攻撃をやり過ごす。

辺りには余波で爆発が何度も起ころる。

爆発による煙が晴れるとザフィーラの右腕に三本ほど先程の魔力剣
が刺さっていた。

「ザフィーラー！」

「気にするな、この程度でビリにかかるほど……柔じやない」

腕に力を入れて刺さっている魔力剣を破壊する。

ほつ、非殺傷設定とは便利だな。

刺されていたはずのザフィーラの腕からは一切の血が流れていません。

「上等!」

ヴィータはそんなザフィーラを見て、猛禽類のような笑みを浮かべた。

「む、この感覚は　　あの一人か」

なのはとフェイトが武装し、二人のことを見据える

「あいつらのデバイス、あれってまさか！？』

カートリッジシステムか。

新たな力を手に入れた二人、果たしてどのよつたな展開を見させてくれるかな？

episode ?? (後書き)

寝ながら話を考えよう。

episode ??? (前書き)

更新が遅れてしまったorz

今更ながらにアザトク気づいた。

この作品って、Diesやつたことのある人しか分からんじゃね？

episode ???

それは、小さな願いでした。

何事も無い静かな日々

ただ、穏やかに続いて行く毎日

私はなにも望んだりせえへん。

私はどんな力も欲しないから

ただ、そばに居てくれれば良かつた。

そしたら、私が皆を守るから。

気持ちが少し、すれ違つ時も

だけど、それでも

魔法少女リリカルなのは『疾走する聖遺物』 a - s 編 始まります。

私ははやてちゃんとスーパーに買い物に来ています。

シャマル side

「ヴィータとザ・ファーラが蒐集から帰つておたら温かい鍋を振るつてあげるんです。」

「わやかど、最近みんなうつむき面でひまつむつしてしまったな

「えい、ええ、その……なんじょいね？」

「言えない、はやてちやんに黙つて蒐集活動していくなって言えない。

「ああ、別に私は全然良えよ。みんなが外でやりたいこととかあるんやつたら」

そういつたはやてちやんの顔は少し寂しげでした。

「うちはもともと、一人やつたからな」

「はやてちやん、安心してください」

はやてちやんの前に出て話しかける。

もう少しこ、もう少しこ終わりますから。

そしたらみんなでまたいつもみたいに笑しながら生活ができるようになります。

「心配はしないよ、もしもやけいひの家族が危険な目にあつたら迅が何とかしてくれるんだ」

迅　　はやてちやんの親友のあの子ですね。

「信頼してゐるんですね」

「それせはや、迅とは今年出合つたけどいつもが一人になるのを嫌つていつも一緒に居つてくれたしな。性格も把握しとる。仮に助けてくれるんくてせひが頼めばやつてくれるで」

迅君のこと話をしたのはやつちやんは本当にうれしかったです。

「前々から思つてたんですけど、せひがして迅君のことが好きなんですか?」

やつ聞くと、顔を真つ赤にしてアタアタし始めちやいました。

「ななな、なんでそんなこと聞くんだやー?」

「ふふふ、やつぱりなんですね」

ああ、こんな時間が素晴らしい。

こんな幸せな時間がまた来れるよひり、頑張らなくちやいけませんね。

s.i.d.e o ut

「私達はあなた達と戦いに来たわけじゃない」

フロイドが宙に浮かぶヴァイータとザフライーラに向かつて話しかける。

「まずは話を聞かせて」

「闇の書の完成を手掛している理由を」

そんなのはとフロイトを腕を組んで冷たい田で見下ろす、ヴィータ

「あれ……ベルガのことわざにいつこののがあるんだよ」

おや、ヴィータが」とわざのよつなかなかに高度な引用が出来
るとは驚きだ。

それは俺だけではなく、ザフィーラも思つたよつて顔をヴィータへ
と向けている。

「和平の使者なら、槍は持たない」

ふむ、言い得て妙だな。

確かに和平しに来たのであれば武装する必要もあるまい。

しかし、一人には意味が伝わらなかつたらしくフロイトとののはは
お互に顔を合わせて首を傾げている。

「話し合ひをしこきたのに武器を持つてくる奴がいるかバカ！ つ
て意味だよ、バ～カ」

「こきなり有無を言わさずに襲い掛かってきた子がそれを言ひへ！
？」

「それにそれは」とわざではなく小話のオチだ

……ヴィータよ、仲間からも追撃を喰らつてはいるではないか。

「うーせー、良いんだよ、細かい」とせ

ヴィータがそう言つたとほぼ同時に上空の結界から紫の光が走つた。

シグナムか

「つー シグナム……」

フェイトが一気に警戒態勢に入る。

「ユーノ君、クロノ君、手を出さないでね！ 私、あの子と一対一だから……」

シグナム対フェイト

ヴィータ対なのは

では、ザフィーラはアルフあたりか？

「マジか」

「マジだよ」

俺から離れているが男子一人のつぶやきが聞こえてきた。

では暇になつてしまつのが一人も居るのだな

ならばそろそろ、俺も参戦しようではないか。

三人称 side

この場に緊張状態が続く中、ヴォルケンリッターの面々は焦つていた。

以前、戦つたことで自分の相手の戦力はある程度は把握している。苦戦は必至、しかも今回相手はカートリッジシステムまで装備してきた。

勝つたとしてもその時はボロボロになっているに違いない。

その時、残りの一人を相手に出来るか？

答えは否だ。

ならばどうすれば良い？

膠着状態のまま、頭を悩ませていると突如
響き渡った。
戦場に声が

『よからう、以前のそこの少年のように決闘を邪魔しに来られても
つまらん。俺が二人の相手になろう』

誰もが瞬時に理解した。

以前、そして今回もずっと誰かに見られていたような感じがしていた。

その正体がこの声の主だと。

そしてその正体はクロノを除く全員が知っている。

この戦場に居た誰もが宙を見上げる。

瞬間、天が爆発した。

爆風が辺りに一気に吹き荒れる。

「よつこや、海鳴の街へ諸君。この街は君達すべてを歓迎しよう。ここで何を望み、何をするかは君たちの自由だ。君たちが攻撃してこなければこちらからも特別干渉はせん……だが、今回は友の家族が関わっているのでな。少々、干渉をさせてもらおう」

そこにはまるで空に広がる夜天のような神秘的な黒さをした腰まである髪をした他者を圧倒する神のような存在の少年が居た。

少年の手には黄金の槍が握られている。

少年が現れてから、立つことすら皆が出来ていない。

なのはやヴォルケンリッターといった、普段の威圧にも耐えている存在達ですら息をするのですら辛くなっている。

「では、クロノ少年、そしてユーノ、死にたくなれば必死に足搔きたまえ」

こうして、死神は表舞台へと出てきたのであった。

episode ??? (後書き)

じゃあ、そろそろ説明の回とか作っちゃおつかな?
でも今更な感じがするし……どげんするか?

episode ??? (前書き)

今日は迅無双www

話の書き方とかが分かりにくかつたら申し訳ありません

やつぱれば田卓の名前決めてないや……

黒田卓で良いかな?

三人称 side

「な、なんで、迅お兄ちゃんが？」

白いバリアジャケットを着て、ヴィータと相対していたのはが顔を絶望に染めて震えた声で呟いていた。

「まさか、あいつがこんなところで……」

「い、いや！」

ジュエルシード事件で数度だけ会つたことのあるアルフとフロイトも絶望に声を上げている。

「う、うああ

」

「く、はあ、があ

」

睨まれているユーノとクロノは息することすらままならない。

「そここの少年一人、どうした？ 息の仕方を教える程俺は優しくはないのだが」

夜天のような黒髪をし、黄金の槍を持つ少年が自分の下に居る一人へと話し始める。

圧倒的存在感でこの場は黒髪の少年によつて完全に支配されていた。

黒髪の少年以外の人間は全て、恐怖し、跪き、息すらも忘れていた。

「来ないのなら、」こちらから行こうではないか

少年 高町迅は手にしている黄金の槍を握りしめ、そんな人間たちを観察している。

「俺がまだ本調子ではない（・・・・・）のに圧倒されることは……」

心底残念そうに言い、迅は溜息を吐いた。

『シャマル、聞こえるか？』

『はい、なんでしょうか？』

『今、捕縛結界内なのだが強制転移は可能か？』

『……一応は。一分ほどお時間をください』

『よからぬ』

短めにシャマルとの会話を終えて、再び一人へと振り向く。

「では、始めようか」

迅が黄金の槍を投擲する。

そしてその槍は一人を貫いた。

そう誰もが思った

「逃げてええええええ！」

しかし、その一人を叫びながら突き飛ばして回避させた少女が現れた。

「ほつ……」

迅が面白そうな視線を向ける先にはなのはが居た。

「はあはあはあ、みんな逃げるよー！」

叫ぶなのはだがその足は震えていた。

「なのは、避けて！！」

フェイトの声が耳に届くとほぼ同時になのはは全力で横に跳んでいた。

一瞬前までなのはが居た場所は衝撃と共に切れ目が入り、大地が裂けた。

「残り40秒だ、頑張りたまえ」

迅は無表情に告げて、もう一度投擲の体制に入る。

「みんな、散つて！ 固まつてちや駄目！…」

なのはも先程よりは冷静さを取り戻し、仲間へと指示を出す。

ゆっくりとした動きで迅は槍を投げる。

しかしその速度は亞音速に近い早さ、なのはたちは着弾の爆風で吹き飛ばされる。

「残り35秒」

カウンタダウンを続ける迅

なのはたちは自分の魂が燃えていくような錯覚に陥る。

「とにかく遠くへ逃げるの……」

恥もなにもかもを捨て去つてなのはたち全員が逃げ出す。

それをヴォルケンリッターが追つ」とはない

否、追えない。

「残り30秒」

ようやく半分を切つたところで更にもう一投

槍の軌道である百メートルほどの直線の道路は地面が抉れ、コンクリは完全に消し飛んでいた。

「ふむ、これでも一割ほどの力も出していないはずなのだが……手加減がうまくなつたと思っていたのだがな」

少しガツカリしたように呟く。

投げた槍はまたその爆風のみでコーノとフュイトを吹き飛ばす。

ビルのガラスも一斉に割れる。

「残り25秒」

迅はシグナム達に一か所に纏まるよつて指示を出して、辺りを見回す。

一投

今度は、ビルに向かつて投げる。

槍は三個のビルを貫いてその先に居るクロノの近くを通り過ぎた。声すらも出せずにクロノは雖もみ上に回転しながら地面へと爆風によつて叩きつけられる。

「残り20秒」

正に絶望、クロノの方へと投げた槍が旋回して戻つてくる。

「（）ひくんでよした方が良いかな？」

「（）で完全に心を叩き折つておけば、確かに闇の書の蒐集が楽だろう。」

だがそれは少なくとも闇の書の起動まで全員の心が戻らないという
こと。

それではつまらん。

だがここで潰れるのなら所詮はそこまでか……）

少し、様子見をしてから一投

一 残り15秒

そう呟く間にモード音速に近い一撃が放たれる。

無情にもその一撃はなのはの近く　　と言つても数十メートルは離れているが　　を通り、なのはを吹き飛ばす。

旋回した槍がなのはの時と同じくフェイントを吹き飛ばす。

— 残り 10 秒、では残り — 投としようか「

なのはとフェイトが吹き飛び、ビルに戦いつかれられているクロノとそれを治療しているユーノの下へと転がり着く。

それはすなわち、一か所に全員が集まつたということ。

カウントダウンを始める迅

ゆっくりと振りかぶり、力を入れ始める

「8」

シグナム達はそんな迅の近くへと寄り、転移の時間を待つ

「7」

次は当てるといつ意志を槍へと注ぐ

「6」

見据えるは若き魔導師達

「5」

“死神”の名に相応しきれの一撃を持って敵を粉碎すべく

「4」

今こそ、その一撃が放たれる

「3……む？」

足下に現れた転移魔法陣

即座に迅はシャマルのものだと判断した。

「どうやら少々用意の時間が早かつたようだな。しかしこれで奴らは救われたことになつてしまつたか」

迅はなのは達を一瞥し、微笑む。

「これも貴様らの運だ、もしも次に敵対するのであればもっと成長したまえ」

そう言って、迅達は姿を消した。

大きな、大きな、心の傷を小さき魔導師達へ
と刻み付けて。

episode ??? (後書き)

これは別に構いませんが、円卓の名前の候補とかもあればよろしく
お願いします。

感想お待ちしております。

episode ??? (前書き)

どうせじゃまなんわ。

23・55分に投稿です。

なぜに時間書いたしwww

最近PCの調子がすこぶる悪くて作品が執筆できません。

楽しみにしてくださっていた方々には本当に申し訳ありません。

もつ少しPCの修理がかかるかと思いますがよろしくお願ひいたします。

「予想よりも転移の準備が早く終わったのだなシャマル」

「と言つても数秒ですよ。もつともそのおかげで彼女たちは無事だつたのですけど」

俺は転移してはやての家に戻つてくるとさうかくシャマルを称賛した。

「そうだな、これも彼女たちの運命だったのだと思つしかあるまい」

「そりでなければ逆につまらんがな。

「それよりもお伺いしたことが

「なんだね？」

「先程の槍はなんですか？ その……何と言いますか私は遠見の魔法で見ていたのですがそれでもなんか心にこう 穴が開いて行くような感じがしたのですが」

「ああ、あれは私の武器だよ。心に穴が開くと感じたのは魂が消滅仕掛けていたのだ」

「魂ですか？」

「うむ。説明は少々面倒なので省かせてもらつが、あれでも本来の

一割ほどじか出せてほおりさん

「あれですか！？」

「もしも仮に本気で撃っていたとしたら街を一つは破壊する自信がある」

これは虚心とかじやなくて本気の話だ。

「……では、次は本気を？」

「いや、理由は言えんが本気は出したくても出せんのだよ
もどかしい話ではあるがな。」

さて、シャマルとの話はこらへんにしておこて周りで見ている他の三人も何かを言いたそつだし聞くともするか。

side out

リングダイ side

私は何度も何度もなのはさんの兄という人の映像を見ていた。

なんといつ恐ろしき

なんといつ破壊力

なんといつ神々しさ

今まで私は多くの人の命を奪ってきた。

だけどもこんな圧倒的な力があれば助けられたのかもしれない。

いや、それは余計な考え方。

今回の闇の書事件ではなのはさんに兄と鬭わせることになる。

恨まれるかもしれない。

実際にアースラ内でも反感を持っている人も多い。

それでもやらなければならぬ。

こんなところで止まつていてはいけない。

私は救われるべき人間ではないのだから。

このよつな苦行は当たり前だ。

罪は償わねばならない。

決して、決して、私は救いを求めてはならない。

未来永劫、私は罪を償いながら生きて行けばならないのだ。

そして私はこの“死神”的映像をもう一度見始める。

ああ、なんと素晴らしい御方なのだろうか。

s
i
d
e

o
u
t

episode ??? (後書き)

短い、でもこれが今の限界なのです。

ではではまたねんじーりゆうで。

感想お待ちしております。

episode ??? (前書き)

今回は幕間的なお話なのでかなり短いです。

e p i s o d e ? ? ?

? ? ? s . i d e

ここはいつも変わらない。

私は砂浜に立つていつものように向こうを見ていた。

私は“ずっと”ここにいる。

「あなたに恋をした、跪かせていただきたい」

目の前でロープを被つた男の人が跪きながら私の手をとつて見上げてくる。

「ふふふ、こんなちは。カリオストロ」

この砂浜に現れる私以外の人

でもこの人は なんだよね。

そう、ここは普通の人間が来れる場所じゃない。

私の為の世界

夢と現の間に存在する、世界

今日も私はここで一人、黄昏を眺め続けた。

目が覚める。

「ん、んっ」

寝起きは比較的にいい方だ。

私はベットから降りて服を着替え、朝食を取りに行く。

食堂では地球の料理も出たそれでいいので少し楽しみだ。

「おはよー、」飯あるっ。」

「お、チビッ子の中ではこつも一番だな嬢ちゃん。そんな嬢ちゃんにはおばあちゃんが一品おまけしてやろう。」

『氣前が良い人だ、食堂のおばちゃんは。』

私は「」飯を食べて食器を片づかないと、医務室に向かった。

中に入ると、なのはとクロノとフュイトがそろぞれのベットで寝ていた。

「みんな、元気？」

「ああ、元気だよ」

「私も大丈夫だよ」

「.....」

クロノとフロイトは元氣らしい、でもなのはが落ち込んでるみたい。

「なんで、迅お兄ちゃんが

」

二人に話を聞くとずっとこねばっかりらしい。

一体、なにがあつたんだろう?

side out

episode ??? (後書き)

ああ、一体正体はだれでしょうか？

答えは
みんなわかつてゐるだらうし良いか

episode
? ? ? (前書き)

今日は長めかな?

? ? ? s . i d e

「あなたに恋をした」

この私が……うえん迂遠かつ婉曲かつ理解を期待せぬこの私が……ここま
で素直、簡潔に、他の解釈を寄せ付けない直言を口にしたのはなぜ
なのだろう。

「あなたに跪かせていただきた、花よ」

無論、よく分かっている。つまりとにかく、私は緊張してるのだ。

恐怖で、そして羨望で……いやいや、もしかしたら憎悪かもしけな
い。

ただこの少女に、無視はされたくないと思つた。

取るに足りぬ一人として、流されることは避けたかった。

ゆえに言葉の装飾は剥されて、ひどく無粋な……婦人を口説くにしては雅の欠片もない直言を口にしている。

実際、この時の私は初心な少年のようだった。

私の少年時代などといつもの実在したかどうかはともかく、青い
と言われる時代はこのとき、一瞬。

「己の発言に「しまつた」
だけ。

などと恥じ入ったのもこのとき

今に至るも不覚なのだが、あまりにそれが強すぎたため、一瞬の熱に紛れて判別できなかつたのだ。

既知か未知かを。

常時曖昧な私が初めて確たる態度を示した結果は、もつとも曖昧なものになつたという笑い話。

これは私の、そうした甘苦い失敗談

君に共有してほしい、彼女への愛情。

「あなたは、誰？」

私は君の

「あなたの奴隸だよ、アリシア・テスター・ロッサ。

あなたの所有物であり、あなたの力であり、あなたの分身としてあなたを救い、あなたのお陰で幸せを得るあなたの傀儡だ。

わたしはそのために生まれた

ゆえに、さあ、田を覚ましておくれ。

実際に喜ぶべき」とではないか。

私の友が君のために、この既知とこの世界を壊してくれんだ
う。

はやく目覚めなければその始まりが見れぬやもしれん

ああ、まったく、本当に　いい友、いい女、そしていい運
命を背負つたものだと誇りたくなる。

素晴らしい

カドウケウス
双蛇は切れぬ。断てぬ。引き裂けぬ。

今再び、前にも増して、強く深く絡み合おう。

より完成へと近づくため、脱皮して生まれ変わらるのだよ。

幸いなことに我が末裔もいる。

さあ、始まりはそう遠くない。

s i d e o u t

? ? ? s i d e

目が覚める。

「ん、んう

寝起きは比較的にいい方だ。

私はベットから降りて服を着替え、朝食を取りに行く。

食堂では地球の料理も出されているので少し楽しみだ。

「おはよー、」飯ある。」

「お、チビッ子の中ではいつも一番だな嬢ちゃん。そんな嬢ちゃんにはおばちゃんが一品おまかしてやろう」

氣前が良い人だ、食堂のおばちゃんは。

私は「」飯を食べて食器を片づけると、医務室に向かった。
中に入ると、なのはとクロノとフロイトがそぞぞのベットで寝ていた。

「みんな、元氣？」

「ああ、元氣だよ」

「私も大丈夫だよ」

「…………」

クロノとフロイトは「元氣らしい」でもなのはが落ち込んでるみたい。

「なんで、迅お兄ちゃんが

一人に話を聞くとずっと「ればっかりらしく」。

一体、なにがあつたんだろう？

s i d e o u t

前回の作戦としてはまず、前回ヴィータが向かつた砂漠にシグナムが向かつ

そうして、管理局の戦力を俺らに集中させてヴィータが俺らより離れた世界で蒐集をおこなう

悪くはない作戦だった。

結果としてはヴィータはなのはに長距離砲撃魔法を放たれたが仮面の男が助けに入った。

そのおかげでヴィータは脱出

シグナムとフェイトの戦いはフェイトが突然ヴィータを助けたという仮面の男に胸を貫かれてリンクアコアを取られたらしい。

仮面の男のことが気になるな。

しかしそうそろ俺も蒐集の手伝いを行つか。

「では行ってくる」

「はい、あなたに限つてなんにもないでじょが行つてらっしゃい

「ああ、ヴィータとシグナムは休んでおくのだぞ」

「わかつております」

「重畳」

三人に見送られ、俺はシャマルの転送で移動する。

ちなみに、時空転移のシャマル特製マジックアイテムを貰っているので転移できないなんてことはないだろう。

目の前が光に包まれ、光が収まつてみるとそこは古城であった。

「ふむ、プレシアの時に箱庭に似ているな

奥に進んで行くとどうやら誰もいない居ないようであった。

見る限り、大昔には人が住んでいたのだろうが今は何らかの理由でいなくなっているようだ。

「あなたはだれ？」

ダンスホールに出ると、ふと声を掛けられたので振り向く

するとそこにはフュイトが居た。

「いや、アリシアのほうか

アリシアの後ろには武装した管理局員となのは、フュイト、クロノ、ユーノ、アルフ

恐らくは主戦力の人間がほとんどやつてきていた。

だが今はとくに力を抑えるつもりもないでのアリシアを除く全員が身動きが取れないようだが

「……あなたはなんで私の名前を知っているの？」

「失敬、名乗るのが遅れた」

なのでアリシアの後ろの人間などは気にせずに、仰々しく頭を下げて名乗る

「俺は高町迅 聖槍十三騎士団黒円卓第一位 死神デイア・ゴット・テス・トレス高町迅、

君の名前は？」

アリシアは少し考えて頷いた

「私の名前はアリシア・テスター^{ロッサ}」

「良い名だ」

俺は手を差し出して膝をつく

「お近づきの印に一曲踊つてはくれまいか？」

「……わかった」

そっと俺の手を取るアリシア

俺はパチンッと指を鳴らして楽団を生み出す

そして一人で音楽に合わせて踊りだす。

アリシア side

その衝撃は、閃光に似ていた。

「お初にお目にかかる、私の事はカールから聞いているかね？」

身体を握りつぶされるような感覚は一瞬、気づけば私はこの男性の腕の中にいた。

同じ年のはずなのに、意識に霧がかかってくるような美貌、典雅な高貴さを感じさせる声。

そして私を抱きしめる腕の抗えない力強さ。

おそらく、彼は男性として完璧な美点を持つている。

強いて言つならば少しだけ女の子に近い顔づくりつことだけ。

9歳児だが、あらゆる角度からみてもそれ以外のことは見つからず、その輝きは失われない黄金率

だけど……私の中には言いつよいのない感情があった。

決して高位の男性に惹かれる女心ではなくて

なんというか、言葉にできない感覚

樂団の調べが聽こえる。——はどこかお城の大ホールで、何十人と
いうオーケストラに囲まれたわたしたちは、その中心に立っていた。

「彼らは俺の騎士で、同胞だ。皆が君を歓迎している」

そして、わたしは事態を認識できないまま踊った。

「彼は俺を何と言つていたね、アリシア」

不思議だつた。分からなかつた。わたしは踊り方なんて知らないし、貴族めいた社交場の作法なんか何も知らないはずなのに。

「理解を深め合う最良の一つとして、共通の知人を話題にするのは有意義だ。あなたの知る彼は、どのように俺を評していたのだろう。是非聞きたい」

非の打ち所がないエスコートで、わたしは宮廷に生まれ育つた娘の様に扱われた。

誰もこの身を蔑んだりしない。

これは何なの？　どうしたことなの？

たぶん“常識的”に考えれば、女性の大半が夢見るような歓待を受けているのは間違いない。

およそ欠点の見つからない男性から、おそらく最高のもてなしを遇されている。

すべてが華美で、豪華で、洗礼されて……気遅れしても嫌がる女は稀だらう。

でもわたしはどうして、この男もこの城も、この音楽も何もかもがどこか違つて見えた。

言葉にできない。分からぬ。これをどう表現したらいいのだろう。まつすぐに見つめてくる金色の瞳から、思わずわたしは目を逸らしていた。

耳に流れてくるような管弦楽。莊厳な音色は透き通り、見事な技量で統率されているのがよく分かる。

だけどその演奏を続ける一人一人は、どこか歪に沈んで見えた。

まるで喪に服している最中みたいに。

いや、それよりも……

「…………」

なに？ なに？ 何なのこれは？ よくよく見れば残らず全員、身体の一部かその大部分を失っている。

中にはとても生きているとは思えない人達さえいて……

わたしは、直感的に理解した。

これは、死人の樂団なのだと。

「答えは？」

黒い髪をした、金色の瞳の男性は微笑する。

彼は、彼一人だけは異常なほどに欠けているものが何もない。

まるで、やう、この人と、この世界は……

「地獄……」

数え切れないほどの人間を呑み込んで、その死と苦痛を渦巻かせて
いる。

そんな印象をわたしは懷いて……

「なるほど。変わらんな、あの男も」

彼は悪魔のように優しく言ひ。やうだ、異常は最初からあつたのだ。

なぜわたしが、こんなにも情緒溢れた思考と感情を持つのだらう。

本来知るはずがない語彙や概念を持ち得るのだらう。

今こんなことを考えているところと血体、すでに充分すぎるほど
に普通じゃない。

「これは…痛み？」

だから、知らずのうちに呟いていた。

持つていなければ、その知識がわたしのわたしである部分を壊していく。

演奏を続ける使者たちと同じように戸。

「地獄、地獄か……個人的には呼び名など、どうでもよいがね。だが無感であれば痛み（歡喜）はない。俺の世界においてそれは許さん」

だから分かった、これは恐怖。

わたしがこの男性に懐いた心は、どうしようもなく怖いというだけ一つ。

ああ、だってカリオストロも言っていたもの。

とてもとても怖い人だと。

みんなも震えながら感じていたもの、この死神が恐ろしいと。

その原因……具体的なものがわたしには分かる。

「あなたはたつた一人」

わたしと同じだけど違うのだ。

たつた一人外れているのは同じでも、彼は一人で他の全てを塗り潰せる。

「かもしけん」

そう、喻えるなら。

「君は大海に落ちても溶けぬ宝石。俺は大海を染め上げる墨のようなもの」

共に一粒、一滴だけど、その違いは影響力

「霸道と求道、カールはそう言つていたな。前者は俺、後者は君だ。俺としてはそちらの方が眩しく見えるよ。我が配下にも似たような資質の者が複数いるがね」

分からぬ。分かつてはいけない。だけど嫌になる。分かつてしまう。

「カールは霸道の激突を望んでいる。無論俺も、そこは同じ。ゆえに彼がいて、彼が愛する君が要るのだ。問おうアリシア、この地獄（俺）をどう思うかね」

演奏は週末のレクイエム。

それを奏でるのは死者の楽団。

彼の世界が海に落ちれば、総てその色に塗り潰される。

だから……

「怖いよ」

わたしが、そしてあの人……この死者の国に犯されて消えるのが

怖い。

おやじく今、生涯初めて、わたしは拒絶といつもの意味を知った。

漆黒の男は笑う。その一言を待ち望むよつこ。

「ならば共に天を戴かず 祝おう、ソルジャー宣戦は布告された」

衝撃は閃光に似て、輝く槍の形になる。

城を搖るがす鬨の声が、数百万の痛み（歡喜）となつてわたしの胸に突き刺さる。

「その誓い、努忘れぬよつに呪いを送ろう。痛みが胸にある限り、そは御身を溶かし続ける」

旅に出たいかと前に言われた。ずっと一人で歌い続けたいかと質問された。

私はあの時、それに答えることができなかつたけれど。

「わたしは負けない」

変わらなきやいけない、あの砂浜で一人歌い続けていたころとは違う。

世界といつ名の海の中でずっと一人、溶けない石ころであつたわたしは、今この時から変わって行かねばならない。

わたしはこの世界に一步踏み出して、もうと止まれないんだ。

漆黒の男、高町迅は俯いて、喉を鳴らし、やがて天を仰いで大笑いした。

見事、ははは　　まつたく、いや……上出来ではないか、教育が匪きすぎだぞフレシア！

しかし、これは……くくくく。過程として詮無いとはいえ、腹立たしいな、彼女の高潔なる覚悟も既知だ、無意味だ。いや、福音へと至る道へとして甘受するかな、終わりは着実に、そして確実に近づいている……」

迅はわたしから一步離れる。

「楽しみだ。実際に楽しみだ。俺に未知を見させてくれ。この回帰を壊してくれ。決戦はその時、我が軍勢レギオンと最強を謳う断頭刃をもつてお相手をすると約束しよう。

さらばだ、我が宿敵よ

伽藍を揺るがす哄笑と、反比例して収縮していく漆黒が飽和とゼロに達したとき、わたしを吹き飛ばす爆風を残して高町迅は消失していた。

episode ??? (後書き)

いかがだったでしょうか?

物語で穴がそろそろ沢山明るみに出てきています(汗)

感想をお待ちしております

episode ??? (前書き)

お久さです。

今回はかなり短い www

アリシア side

私は迅が消えてからその場でしばり／＼ボーッとしていた。

なのはちやんのお兄さんでカリオストロの友達

……恐かつた

とにかく一つの修羅場は潜り抜けた……と思つ

でも

「なんで私ってば宣戦布告なんてしちゃったんだろうね」

そんなバトル展開はなのはちやんやフロイトに任せとけば十分だ
よ~

そもそも、私は魔法があまり使えない

お母さんやフロイトみたいに雷で闘うなんてありえない

魔力変換質が違うからいつもあるけど、元来の魔力保有量が少
ない

これじゃあ戦うことはなんてできな~よ

『だってなんか『我が軍勢レギオンと最強を謳う断頭刃を持つて相手しよう』とか言つたもん。

この前は槍でだつたでしょう?

じゃああれでも本気じゃなかつたの?

つて、なんで私つてば戦うことを前提で考へてるのかな。

『ちょっと、アリシアさん大丈夫!?』

いきなり空中に映像が出てきて、リンディさんが現れたことに少し驚いたのは内緒だ。

「うん、大丈夫。でも闇の書は持つてなかつたよ」

「それについてはわかっています。それよりもフュイトさんが

「

私はフュイトが謎の仮面の男に襲われて、リンクavezコアを蒐集されてしまつたとの報告を聞いて急いでアースラヘと戻つた。

しかし、私の胸には迅とのやりとりが残つていたのだつた。

……戦いたくないよぉ（泣）

side out

はやて side

なんや、昨日から迅が楽しそうや。

「なあ迅」

「なんだね？」

ちなみに今は風呂

今日はみんなの帰りが遅くなるらしくて、久しぶりに迅と一人きつせ

「昨日から楽しそうやけどもなんかあつたん?」

「ああ、あつたさ。」の俺が宣戦布告をされたのだよ

なんや、それだけかい つて

「いやいやいや、じんだけやねんその子!？」

一応、ウチは迅との付き合いもそこそこ長くし良く分かる。

こいつに喧嘩売るなんてありえないで、そもそもそんな気が起きること事体がありえへん。

「残念ながらそれも既知だつたがな」

はあー、既知つてもんはなんやねん。

そんなに迅を苦しめたいんか？

そもそもって迅が未知を味わった時、つちの「とをショック死させ

る気がいいな？

だって迅が未知を味わうなんて」と、伊田創成ぐらこのことが起きると味わえんとちやう？

身体と頭を洗つてもらい、風呂の中にへるといひは迅に背中から寄りかかる。

この態勢、世間では恋人座りとか言われといひしきども……ふふふ、うわと迅がカツフルか

こんな状況だし、いつを洗つてしまつか？

いやこやこや、やめてないい。

今はこの状況で幸せなんやし、変える必要なんであらへんや。

「しかしまあ、迅に宣戦布告ねえ……頭おかしくんぢやうへ。

「わうこうが、よほはやても俺に喧嘩を売るではないか

「それなうが頭おかしいひとか？」

なんかムカついたので頬を引っ張つてやる。

「ハハハ、いまひやりこやにをこうか」

「む、よりこもよつて迅に頭がおかしくて言わた、遺憾

そう言いながら頭を迅の胸にペラタコとくづかる。

「怒り切ってしまったな、まだ謝罪せねばな」

「せやで、だから今日ま一緒に寝よな」

迅は誰にも渡さない、いつものやつ。

だからいつも一緒に居てな、迅

side out

episode ??? (後書き)

はやては今のところヤンデレではありません。

言つなれば一人だった時代に現れた親友に依存していくようなものです。

ヤンデレにするかは書きながら決めて行こうと思います。

忘れられ気味ですかアンケートの「協力よろしくです。

地雷とわかついていても挑んでみるのが俺です。

episode ??? (前書き)

さてと、リインフォースを生かすか生かさないかどうしよう?

「ほう、今日は友の家に泊まりに行くのだな」

「せや、だから留守は頼んだで？」

「任せよ」

夕暮れ時、はやは本日は友の家に泊まるひじへ俺を任して
きた。

「じゃあ行つてへるで」

「待て。シャマルよ、付き添つてしゃつてくれ」

「分かりました」

シャマルならば護衛にもなるし、不測の事態が起きよつとも対処で
きるはずだ

「じゃあ今度こじへ行ってへるで」

「ああ、また明日」

今度こそ俺は一人を見送つて、リビングへと向かった。

「さて、正体を明かしたらどうかなその一人？」

いつの間にか家中に入ってきた二匹の猫に顔を向けながら言った。

「いやー

「いやあ

「ほつ、あくまでも猫を貫き通すか

「ではしばらく使っていなかつたことだし、俺の断頭刃の創造位か

」

「すみませんでした！」「

光を放つて人の姿になる」四

創造位階の意味もわからんだろうに、本能でそれを感じ取ったか。

「で、貴様らはなにものだね？」

「は、はい、私達は

」

話を纏めるとこつだつた。

闇の書はまるか昔にプログラムが壊されており、そのままではやての生命にかかる

本当ならば闇の書の覚醒から暴走までの一瞬の時間ではやてを瞬間冷凍して次元の狭間に送りつとしていた

しかし最近、それでは完全な封印または破壊が出来ないと気づいた二人の主であるギル・グレアムはどうしたものかと悩んでおりながら案はないかと模索していく、その間に闇の書に異変がないかの監視をこの二人がしているらしい。

「なるほど、そういうことか

「で、なにか良い案はないでしょうか？」

「俺にはないが、一人どうにかできやうな者を知っている」

「ほんとかにや！？」

「ああ、では丁度俺以外に誰もいないことだし呼んでみるか」

フレシア s.i.d.e

「むむむ、どちらにしましようか？」

私は現在、大変危機的な問題に直面していた。

「アリシアとフェイ特の洋服……お揃いにするか、しないか」

お揃いにしたほうが良いかもしねないけども、あえて違う服にすることで個性を出すという手もある。

いやまた、早まるなフレシア・テスターッサ。

私には金銭的な面での余裕がかなりある。

なうばむじとせーつ

「あいつがとくわいこました」

「ふつ、私の勝ちね」

結論、両方勝つてしまえばいい

ふふふ、我ながら恐ろしいわ。

「（フレシアよ、今から指定する家へと来い）」

突然、閣下からの指令

私が買い物したデパートから近いわね。

「仕方がない、転移魔法で一度この品を家においてから行きましょうか」

出来る限り素早く行動し、指令を受けてから五分以内に到着した。

「遅くなつて申し訳ありません」

「構わんよ、早速だが闇の書に興味はないかね？」

闇の書、元の名前は夜天の書

本来は術式を集める、いわば標本または資料本のようなものだったのにそれを悪用しようとした誰かが変に弄つてしまいバグを起こし

「技術者として言つなれば大いに興味があります」

「では、明日までに直す方法を見つけて」「」

ぽんつと闇の書を投げてくる迅様

「「れはー?」

「なんなら、この家を使つてもうつても構わんよ

「早速取り掛からせていただきますー!ー」

やはりなんて素晴らしい方なんだらつか

私の技術者としての望みも叶えてくれるだなんて……このお方について来て正解だったわね。

もつと、もつとよー

この探究心を埋め尽くすようなものを私に頂戴!ー!

世界の真理すらも解明させて頂戴よー!ー

私は嬉々として迅様の御命令に応えるべく頑張るのであった。

episode ??? (後書き)

くう、難しいな書くのは。

絶賛スランプ中です。

episode ??? (前編)

皆様、一ヶ月ぶりとなりましたね。

一言

もうね、話が浮かばない浮かばない。

今日は難産でしたw

久しぶりだったので主人公の喋り方つてこうだつけ？

とか思いつつ書いてます。

違和感などがございましたら教えてください。

フレシア side

私は昨日、闇の書を渡されてから家の研究室でずっと闇の書の解析をしていた。

フェイトはアースラに泊まっているので家には私以外誰も居ない。

結果を報告するために私は迅様に通信をする。

「では、闇の書の管理プログラムを残すのは不可能だと?」

「……申し訳ござりません」

あれから休みなくずっと調べていたがどうやら不可能に近いらしい。

「詳しく説明を聞こひ」

「はつー。」

闇の書が暴走し、仮にそれを抑え込めたとした場合、夜天の書の管理システムの中に闇の書の暴走プログラムが残ることになる。

なので結局は再び暴走が起きてしまう。

暴走を防ぐためには管理システムの破壊か、完全情報掌握による情報変換処理が必要

後者の場合、管理局のパソコンパーテーを使って最速でも一週間はかかる。

その前に管理システムの存在が自動消去されてしまうために不可能に近い。

「ほう、よろしい。なかなかの成果であった」

「へ？ はつ！ お褒め頂きありがとうございます……」

私の予想に反して画面越しの迅様は機嫌が良さそうだった。

「大儀であった。昨日から一睡もしていないのだろう？ 休みたまえよ」

「わうわせいただきます」

通信を切ってソファに横になる。

あの笑顔……まさか私の想像を超えて、なにか助ける方法があるとでもいうの？

「へへへ、我ながら遠足前の子供のように楽しみでしじうがないわ

これじやあ寝れないじやないのよ。

本当に楽しみね。

通信が終わり、俺はリビングに戻る

「闇の書の主は大いなる力を得る、守護者である私達は誰よりもそれを知っているはずでしょ？」

「そりなんだよ、そりなんだけどさ、私は何か大事なことを忘れている気がするんだ」

「？」

リビングではヴォルゲンリッターの面々が深刻そうな顔で話していた。

ほつ、ヴィータよ。

以前までの都合の悪い記憶が飛んでいるはずなのに良くなき付いたものだ。

しかし、ページが集まりはやてへの闇の書の浸食が進んでいる。

この者らに事実を伝えるのは後の事で良からず、はやての様子でも見に行く

ドガシャンッ！

はやての部屋の方から大きな物音がした。

敵襲……ではなさそうだ。

様子を見にはやての部屋に行くとはやてが胸を抱えてベットの下に倒れていた。

「はやてー。」

「はやてちやんー。」

ブライータとシャマルが急いではやてに駆け寄り搔かってみるがはやはては返事もせずに苦しんでくる。

「触るな、そつとしておけ」

「わかった、誰か救急車を「既に呼んだ、それよりも直ぐに運び出せる用意をしておけ」了解した、迅!」

「ああ、大丈夫みたいね。良かつたわ」

病院に運ばれたはやはては口田女医の診察を受けて、現在ベットに寝かされてこむ。

「はー、ありがとうござります」

笑顔で答えるはやて

.....
ふむ

「はあ、ホッとしました」

「せやから、ちょっと眩暈がして胸と手が攣つただけや言つたやん。もひ、みんなして大事にするんやから」

身振り手振りでやれやれと呆れた様子を出す、はやて

「でも、頭をうつてましたし」

「なにかあつたら大変ですから」

「はやて、よかつた」

シャル、シグナム、ヴィータは安心したように呟つ

どうせやうにいよいよだな。

「まあ、来てもひつたついでにむけようと検査とかしたいからゆづく
りしていいってね」

「はい」

「じゃあ、シャーマンってシグナルをどうやって」

Г Г ?

俺は石田女医を見る、すると向こうつも俺の顔を見てきて何かを訴えかけてきていた。

なるほど、流石に俺よつもはやひとをかぶらぬるだ。田中女医は云つてゐるが、

よからひ、俺が側に居れば良いのだな。

三人称 side

「今回の検査ではなんの反応も出てないですが、攣つただけ……といふことはないと思います」

「はい、かなりの痛がりようでしたから」

病室を出たところで石田女医、シグナム、シャマルの三人は話していた。

「麻痺が広がり始めるのかもしません。今までこいつ兆候はなかつたんですよね？」

「ど、思つたのですが。はやてちゃん、痛いのとか辛いのとか隠しちゃいますから」

「発作がまた起きないとは限りません、用心のためにも少し入院してもらつたほうが良いですね。大丈夫かでしょうか？」

シャマルはシグナムの顔を見る。

「…………はい」

俯きながら答えるシグナムの顔は悲しげであった。

「それと発作があつたかどうかは後で迅くんに聞きくとしまじょう

「なぜ、迅に？」

それはシグナムとシャマルの一人が思った疑問であった。

「あの子はこの半年でありますがはやてちやんとずっと一緒に居てくれました。はやてちやんの行動や癖は分かりますし、それにはやてちやんが一番に心を開いている人物ですからね」

だから嘘を見抜きやすいし、強がつているはやてちやんを懐柔しあすい

そう石田女医女医は言つ。

素直に一人はその通りだと納得し、そして自分がそのようなことが出来ないことに憤りを感じたのであった。

「では、戻りましょうか」

「……………はい」

「……………わかりました」

二人はもつとはやてから信頼され信頼するようになろうと心に決めたのであつた。

side out

「え、入院？」

「ええ、やつなんです」

俺は石田女医から事情を聞き、「うじてはやでの病室にいた。

シャマルから入院の話を聞いて、はやは寂しげな顔になる。

「でも、検査とか念のためですから心配ないですよ。ね、シグナム」

「はい」

至つていつも通りの態度で接する一人

「それは良えねんけど、うちが入院している間は誰がみんなの料理を作りんや?」

「うぐつー?」

この事実に一番ショックを受けたのは間違いなくヴィータである。ことは間違いない。

「そ、それはまあ、なんとかします」

シグナムもことの重大性に気付いたようで少しだが汗を掻いている。

「そうですよ、大丈夫です!……多分」

逆に嬉しそうにするシャマル

「絶対にシャマルに料理を作らせてはアカンで」

「「もうひと（です）」」

その場で両手両膝を床につけて。一瞬するシャマル

「毎日会って来るよー……だから、大丈夫」

一番はやてに懐いてくるヴィータが心配したりせずの

「ふふ、ヴィータは良え子やな。でも毎日でもなくとも来よ」

頭を撫でながらヴィータをあやすはやて

じぱりして、石田女医が現れ面会時間の終了の知らせを告げて来た。

「迅くんは残つて」

他の人々を返して俺は石田女医の言われた通り病室に残る

「じゅあ、お世話ねえかね。たまに様子を見に来るのか？」

「心得た」

石田女医はそのまま病室から立ち去る

「え？ 迅は残るん？」

「ああ、迷惑か？」

「こや、いつ嬉しおども、ウツー？」

胸を抑えて苦しむまやて

「迅、迅、迅！」

はやてが必死に俺の名前を呼びながら服を掴んで引き寄せる

「苦しこんや、痛いんや、側に歸つてほしくんや」

「よろしく、はやての側に俺はなせないか」

冷や汗を流しながら俺に抱きつき、何度も何度も俺の名を呼ぶまやて
ビリヤリ押つた以上に闇の書の漫食が進んでこないみつだ。

「安心したまえ。元凶はもうすぐ俺が断つてませよ！」

そつすれば俺はまやてを救い、未知を味わえるのだらうか？

episode ??? (後書き)

次回、病室での再会です

episode ??? (前書き)

お久しぶりです、ようやく更新しましたw

シャマルside

『なのは達がここに来ると?』

「はい、ですからはやてちやんと石田先生に私達の名を出さないよ
うに黙つてくれませんか?」
「...」

『心得た』

通信を切つて私は一息つく

迅君ならばやはやてちやんの損になるようなことをしないと思ひます
し、『これで一安心ね

しかし、私も迅君に前みたいにビクビクしなくなつたわね。

私だけじゃない、あの死神にビクビクして他のみんなも自然体で
接することができてる

ヴィータちゃんなんて最初の頃は迅君の威圧から解放された後は泣
きながらはやてちやんに抱きついてたのに今じゃあ『アイスを買つ
てほしい』とねだるまでになつたんですね。

迅君があの威圧感を抑えてくれてるからもあるんでしじゅうね

「はあ、それにしても大丈夫かしらはやてちやん」

闇の書の完成まで後少し、はやてちやんの誕生日までには間に合わせてみせるわ。

Side out

アリシア side

私達はすずかちゃんの友達と二つハ神はやてちやんのお見舞いに向かっています

フュイトも怪我が無事に治つている。

治つた時はお母さんに泣きつかれていたな

さて、今の私の問題はそんなことじやない

しつこよつだが迅が本氣で鬪つなんてビリビリローラン

こいこ最近、そればかり考へてる

私の力はお母さんやフュイトみたいに凄くはない。

でもカリオストロは『その力は君の魂の強さによつて変わるだらつ』
つて言つてた

他には私が誰かを殺してその人の魂を吸収するみたいな方法がある
みたいだけど絶対にそんなことはしないもん

近い将来、絶対に私は迅と鬭つうことになる

その時は私はちやんと戻り立向かえるのか？

「はあ……なんで近お兄ちやんは闇の書の序譲譜十冊と一緒にな
いたんだね？」「…」

なのはちやんが最近、よく落ち込んでこる。

まあ、お兄さんのが敵の方に戦つたらやつやあ落ち込むよね。

「戻れん、まだ戻つてきれないの？」

「うそ、まだなの」

「あはは、あなたブリッジだからそれは落ち込むわね

「ハーブとか言われるとなんだか恥ずかしいよ~」

でも、すすかちやんとアコサキヤんとの受け答えもせこつも通つこ
せでいる。

とこつかブリッジだにして知らなーの？

「はやく戻つてしまひこの~」

それは私としても同意、やつすれば敵じゃなくなるからね。

「ハイテヒヤんはなにか戻れさせつこて知らなーの？

「え？ ああ、うそ。私もわからない」

アツサちゃんとかちやんは魔法の」と知らない本当に「とせから言えないか。

「ならアロシアは　　つて、ビッグザウスが着いたよつね

私がそんなことを覚えていたとビッグザウスが病院に着いたらしく。

受付で病室の番号を聞こうと私達は病室に向かつ。

『はーい、ビッグザウス』

病室の扉をノックすると中から声が聞こえてきた

『ひといちやー』

私達は中に入りながら挨拶をする。

「ひといちやー、いらっしゃーー。」

笑顔で迎えてくれるベットに座る女の子

「お邪魔します、はやてちやん大丈夫?」

「うそ、平気や」

「あ、みんな座つて、座つて」

「ありがと」

「パート掛け、セーフあるから」

「うそ」

みんなと楽しそうに話す、はやてちりちゃん。

私もその中に入りたいけどもそれビリゴジヤなかつた。

「（な、なにこの子の魂！…）」

この感じ、迅と相対した時に似ている。

私はちよつと特殊で、その人の魂といつか、そういうものが感じられる。

だからこゝで迅が凄く怖いんだけど。

多分だけどカリオストロがくれた力のせいだ。

話が逸れたわ。

はやてちりちゃんの魂を見ると迅の魂の波長の名残がある。

しかもとても濃い、長い間ずっと一緒に居なかつたりしたらこんなにはならないはずだ。

それもなのはちりちゃんよりも深く、付き合ひがなかつたら駄目

「（とぬつことは、まさかはやてちりちゃんが闇の書の主？）」

「冗談じゃない、私はまさか知らぬ間にこんな敵陣のド真ん中まで来ていたの！？」

帰りたい、今すぐ帰りたい

いつこいつ時は外に出て気分転換しよう

とりあえず私はトイレに行くふりをして屋上に逃げる

「ほう……血のやつてくれるとはな」

「神よ、なぜ私にこのような試練をお与えになるのですか?」

○→して涙を流しながら私は呟く

「だが残念ながら俺はここで開戦するつもりはない」

「え?」

「既に君も気づいているだろ? はやは夜天の書の主だと」

「……闇の書の過去を知っていたのね」

「無論」

迅ははやてちゃんのことを気に入っている

親友が死ぬ手伝いをするとは……思えなくはないけども、と今回は違つはずだ

ならば何かはやてちゃんを救う策がある?

「迅……貴方は」

「それを知るにはもう少し待ちたまえ」

まるで私の考えがわかつていたかのよつた言葉

「それに俺は君と交わした約束も必ず守りやつ」

「……戦いつの?」

「ああ、必ずやいつか君と敵対した時には、我が全力を持ってお相手しよやつ」

はあ、本当にビビリしそうへ。

episode ??? (後書き)

むむむ、久しぶりだからどんな風にキャラを動かすか忘れちまつて
るぞwww

episode???(前書き)

お久しぶりです、いまだに騎士団のメンバーも決まってないですが
投稿させていただきました。

日も沈み、なのは達がはやてと別れた後

俺は少し経つてから病院から離れた建物の屋上に居た

病院の屋上ではなのは達とシケナム達が会話をしている

一
触即发

正にそのような状況で現れたのは一人の仮面の男だった

ほんの猫共が

目的は闇の書の覺醒か

予想通り、二人の男はなのはとフェイトを拘束し、シグナム達を闇の書に吸收させて、はやてを召喚する

そして一人の男ははやてとフエイトに変身してはやてに絶望を与える
にいく

「さあ、終わりの始まりだ」

泣き叫ぶはやて

そしてはやは闇の書の管理人格へと姿を変えてしまった

「ほつ……あのが」

俺は闇の書の管理人格を見て、そう呟いた

「また、全てが終わってしまった……一体、幾たび、このような悲しみを繰り返せばいいんだろ？」「

そう言って管理人格は右手を上に向ける

するとその手には黒い球体が現れた

「主の願いを、そのままに」

涙を垂れ流し、管理人格はその球体を放った

「ディアボリックディメンション

闇に染まれ

俺を含め、なのは達が攻撃に飲まれる

このような攻撃、痛くもかゆくもないが……どうやらこれは

攻撃による衝撃が收まり、なのは達は姿を消した。

「逃げたか」

そこいら辺には隠れていると思うが、どうやら目的はなのはたちでは

ないようだ

「主よ、貴女の望みをかなえます。愛おしき守護者たちよ、傷ついた者達を今、破壊します」

管理人格を中心に結界が張られる。

「これで準備は整った」

夜天の書がそいつ言い、目線が俺と合つ

「やあ、初めましてで良いのかな?」

「はい、一応は」

管理人格の背中から黒い翼が生え、管理人格は飛び上がる。

「お初にお目にかかります、地獄殿」

「ああ、じぢりじね。夜天の書」

俺は夜天の書を見上げる

「なのは達はまだそいつくんに居ると想つたのだが、見つけ出さなく
ても?」

「「」冗談を、貴方を無視していたら一つ殺されるかもわかりません
よ」

「俺としては傍観に徹するつもりなのだがね」

「…………それは本当ですか？」

「冗談に思つかね？」

夜天の書はしばらく考える素振りを見せた後、口を開いた
「では、私があの者達に危害を加えるのも了承するところとします
か？」

「俺は傍観者だ、君達の舞台に余計な邪魔はせんよ」

無論、既知を脱け出せるのであれば話は別だが

「……わかりました」

そう言つと夜天の書は俺に背を向ける

すぐさま飛び立つていく夜天の書

「さて
ブレシア」

「はつー。」

俺が呼ぶと、あたかも今までそこに居たかのようにブレシアが現れた。

「ただ見ているだけでもつまらん、少々世間話でもどうかな？」

「世間……話ですか？」

「ああ、やうだとも」

まだ団圓三名の寂しい円卓だ。

このよつて話すのもよからう。

「フレシア、貴殿の聖遺物はどの位階まで達した?」

「創造までは達しました」

ほう、創造位階にまで達したか。

あれは一応、尋常ではない狂氣の果てに達するものの一つなのがな。

「フレシア・テスター・ロッサ、貴殿の願いはなんだ?」

「それは

「

フレシア side

「なるほどな」

私は迅様に自身の事を話した。

「貴殿も俺と同じくカールに業を宣告された身だ、あやつの呪いと共に解くために頑張るのではないか」

「ありがたき幸せです」

カール・クラフト

正直言つて、もう私はあいつには会いたくない。

狂気に溺れ狂うなだけならまだ構わない、でもあいつは完全に違う
もはや本能レベルでの拒絕と言つても過言ではない。

「時にフレシア、賭けでもしないかね？」

「賭け……ですか？」

「ああ、さうだとも」

賭けね……！」お方が賭けだなんて珍しいわ

「それは、どのよつな？」

「なに簡単なことだ」

そつ言つて迅様は空中でなのはちやんとフロイドの砲撃を防いでいる夜天の書を指でさした。

「夜天の書にトヂメを刺すのはぢからか」と言つことだ

この戦い、迅様は手を出さないと言つていた。

ならば純粹に、どちらがトヂメを刺すかを予測するのであるべ。

「私は一応はフュイトの母でありますし、フュイトに賭けます」

「ならば俺はなのはに賭けよつ、勝者には翠屋のケーキ全種類などはどうだ？」

それはまた……凄いわね。

「ええ、わかりました」

絶対に勝つてね、フュイト

side out

episode???(後書き)

どないするべ、獸殿の口調と迅君の口調が違つ氣がしてならない。

それにこのままいくと、聖遺物所有者が多くてオリジナルを作らな
アカン事体にもなりかねん。

どないする、俺！

感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0543s/>

魔法少女リリカルなのは～疾走する聖遺物～

2011年10月9日13時31分発行